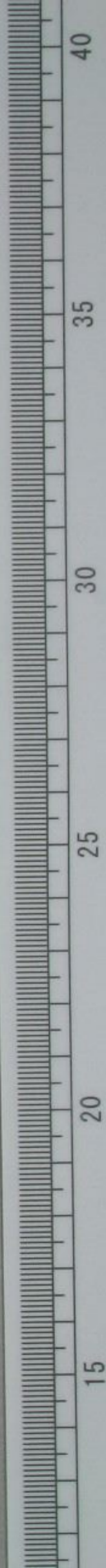




役行者御傳記圖會
上

~~fi
131
1~~

逍遙文庫
文庫 6
188
1



著述 藤東海
 画圖 浦川公左

役行者御傳記圖會卷之上



浪速 瑞雲堂
 書肆 文榮堂
 合梓

役行者御傳記圖會卷之上

浪華 藤東海著

役行者靈驗鐘懸岩之話

並證文をいへりて話

摩訶多羅菩薩とて奉りて七生のむらより。天竺唐土吾朝も修
 行。大和國葛城郡金剛山といふ。三災不壞の宝山とて。孔雀明王の死と待誦
 修行満足仙術を得。能鬼神を馭使也。又或時八雲糸にて上八王自在所に至り
 下八龍宮仙府小遊。撰初箕面山に登て。龍樹菩薩の浄土と并。又或時八雲糸
 山に登り。盤若心經を誦して。本尊の出現を祈り。五八地藏菩薩出現。王へて。か
 く屎糞の相みて。八強剛の衆主と化度せんこと難。として。よび。是を
 吉野の抛地藏といふ。よと。女子出現。身八。跡勒菩薩なり。是も心子不叶

とてなまじくもたまたま。次は青黒忿怒の相ありて。左の手は、劔印と結
 腰をかきへ右の手は、三股杵を執て出現あり。是は、いひのひの仏にて。まゝとてやと
 伺ひたまへ。汝が心願靈鷲山に通じ。爰に出現を金剛藏王なりと。直に岩を開
 て入玉へ。此尊像を。等身より本尊として。嶮難の地。行場をひらき。強剛の
 衆生を化度し。あつひの。巨なるこのな。鐘懸などいへ。絶壁十丈ありて。人攀
 躋さへ。甚危き所あり。から行場に至る。後世といへども恐れざらん。譬は、弥陀
 弥勒観音執至の仏像といへども。踏んたき。念仏を誦題目は舞踊り。小どの強
 剛の者も。嶮難の行場に至て。慳貪邪見も。忽柔和忍辱とへん。三毒
 煩惱の雲暗。慈悲善根の心を生り。行者の方便の功德。廣大無量なり。護
 是。尊まざらん。子と勢の後のいまでも。弥益々教ひ。除生なる。の。吉野
 とよ。貴賤老若隔なく。まゝ。遠近のいともなく。六田の。を。も。越。く。所

の名さへ柳宿。緑の空も。うら。曇かふ。千本の。桃吹かくる。白ひ。花の。春風よ
 心よ。野の。山道も。花の。も。し。で。の。け。ま。く。も。か。こ。き。神。を。伏。か。が。み。心。ま。づ。る。春
 の。日。は。の。り。長。峯。の。な。ま。だ。よ。ひ。と。め。小。見。や。千。本。の。櫻。是。を。く。と。ま。の。り。真。室
 の。其。言。の。葉。も。か。も。ひ。あ。ま。されたり。抑此千本の櫻といへ。八皇九十五代の帝。後醍
 醐。天皇。此。山。子。都。を。遷。し。ま。つ。り。役。行。者。の。方。便。も。ん。帝。さ。の。く。信。り。多。く。水。く
 役。行。者。手。向。ん。と。て。千。本。の。さ。く。ら。も。植。させ。一。花。一。葉。と。い。へ。ども。お。と。ろ。し。を。堅。く
 禁。制。し。ま。へ。後。世。ま。で。の。た。む。け。な。る。べ。し。され。こ。と。櫻。の。實。生。も。持。出。く。藏。王。權。現。の
 御。愛。樹。あり。と。童。ど。も。の。進。ぶ。より。と。手。毎。小。是。を。買。と。り。く。御。山。の。うち。植。れ。也
 是。より。関。屋。の。花。櫻。分。嶽。金。の。鳥。居。高。さ。二。丈。五。尺。ふ。り。て。柱。の。め。り。二。丈。一。尺。あり。上
 なる。額。の。發。心。門。と。書。た。り。弘。法。大。師。の。筆。か。や。二。玉。門。の。金。剛。力士。雲。慶。湛。慶。の
 作。金。峯。山。寺。の。本。堂。小。藏。王。權。現。觀。音。弥。勒。の。二。菩。薩。と。始。め。役。行。者。の。御。遺。像。を

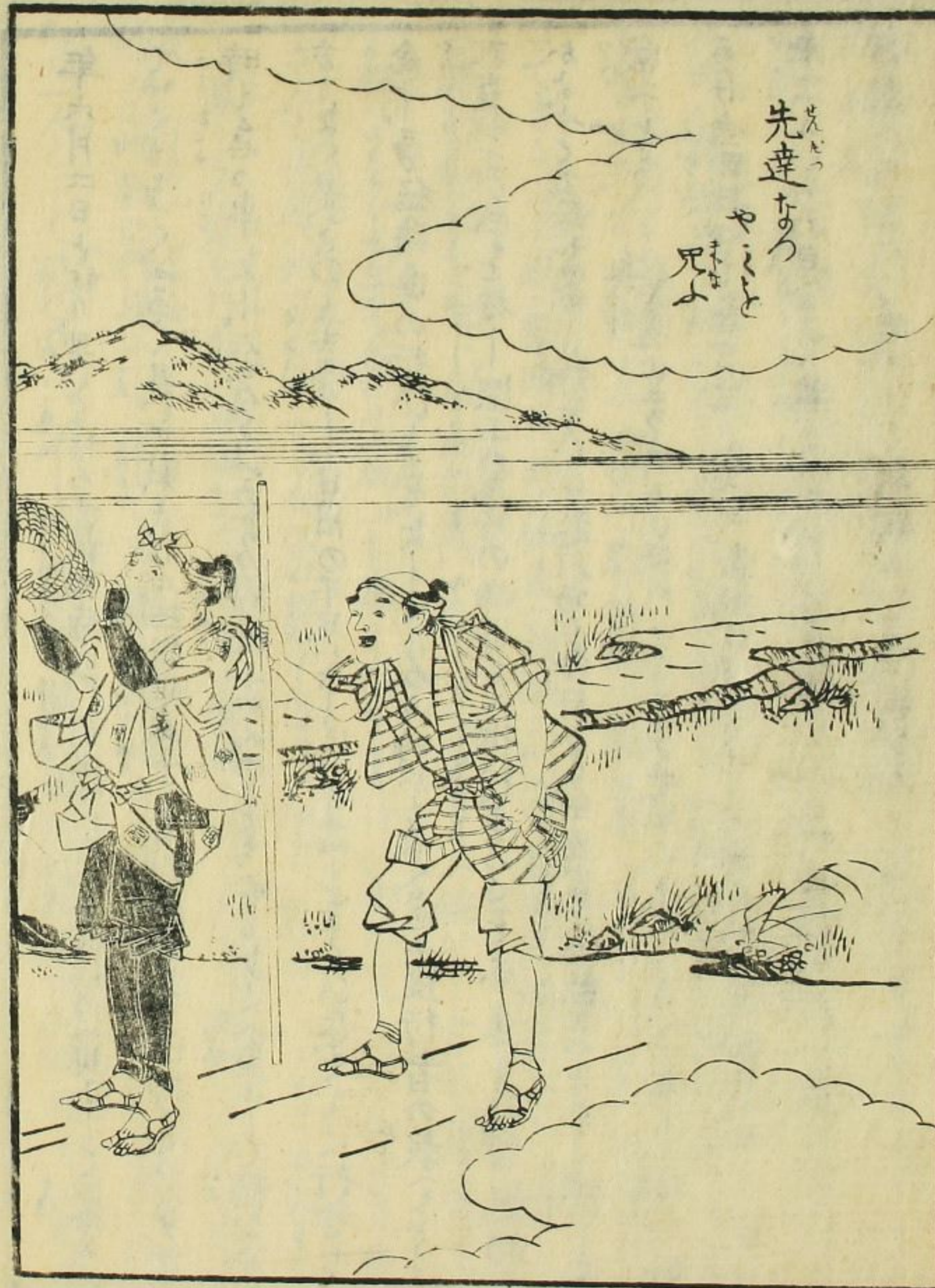
役行者御傳記圖會卷一

特種々さあくの。祢宜言するもあまのりき。是等ハ花のよりの参り。四月八日
 を始として。大峯参りて。町々在々方々。因を結び山上講と号し。をくり迎の
 其時ハ羅絨猩々。縹の幟を建。参詣の人々ハ。螺鈴かけ金剛杖。実ハいりめ
 一き。止立。先達亦あまのり。皆強剛の衆生。是こそ行者の御目的之
 きて。山上嶽へ攀躋。西の臨東の臨。蟻の門。渡り。展風岩鐘懸。よどハ恐
 忍辱柔和の心を生。下向の道ハ。さだま。子さもつ親む。いり。夏。腦の咒
 を頼。ま。と。子さもつ。せ。山を踏。此。も。ん。他行の足とハ。か。べ。つ。なり。哉
 うさんと先達。此方の女子も。向ひの男子も。ま。幼。ハ。乳母とも。ま。つ。わ。ご
 そ。ハ。通。り。る。是。を。行。者。の。功。徳。な。る。べ。し。ま。靈。驗。の。つ。た。た。ま。の。鐘。懸。の。や。ら。あ。を
 尋。り。ふ。峻。難。の。行。場。一。て。高。き。ハ。雲。子。聳。へ。岫。々。た。り。其。岩。上。ハ。一。つ。の。銅。鐘。を。打
 たり。一。人。と。一。て。恐。れ。さ。ん。ハ。ま。一。其。銘。子。曰。く。遠。江。國。佐。野。郡。原。田。村。長。福。寺。天。慶。七

年六月二日とあり。是を尋り。長福寺の門前。一人の山武士あり。負。一。て。峯。入。の
 て。ほ。く。も。ま。く。が。あ。く。是。を。歎。き。ら。る。生。得。正。直。一。て。役。行。者。を。信。仰。さ。る。り。要
 時。も。急。る。事。な。し。志。の。い。も。い。の。か。る。因。縁。ハ。や。人。の。と。も。あ。ま。く。負。一。て。頼。む。べき
 方。も。ま。く。是。を。の。苦。勞。一。日。用。の。不。足。ハ。さ。に。い。と。心。も。ま。く。ひ。た。ま。ご。に。行。者。を
 念。一。勇。猛。精。進。の。行。ひ。と。ぞ。女。一。に。ら。る。或。時。か。も。ら。く。逢。ハ。役。行。者。の。教。へ。を。う。け
 孔雀明王の法を持。深山魔野の幽谷。入。修行。する。こそ。本。意。な。れ。譬。亂。錫。子
 か。よ。ぶ。も。居。ち。の。一。拜。せ。入。り。の。恐。れ。あり。今日。より。出。立。峯。入。の。數。す。つ。ん。と。決。心。一。て
 常。子。と。ち。い。一。古。着。の。ま。の。所。々。の。破。れ。さ。つ。き。ほ。も。垢。ま。く。た。る。も。い。と。あ。ま。く。頭。巾。鈴
 の。け。金。剛。杖。心。も。急。ぎ。い。ら。た。の。數。珠。と。り。の。い。一。仏。前。子。盤。若。心。經。を。誦。一。終。く
 妻子。子。の。の。是。ま。で。幾。と。一。月。を。と。ま。ぎ。よ。一。も。行。者。の。由。惠。ハ。洩。た。る。の。ハ。ま。は
 報。恩。の。為。ち。の。れ。道。中。一。て。飢。渴。子。を。よ。び。死。ま。る。と。も。い。と。心。を。さ。さ。り。よ。な。一。は



先達せんたつ
なるなる
やや
死し
よよ



等も。このよもして我るまを志のぐへーと。さごと一りんば。妾ハ幼子を懐こして
 乳房と含めぬがう。うれげふくりぐ。女の身のまのりかれをよろこぶ。ハ
 何れにせむ。唯峯入の出入と。心うれしくかこふなり。必しも妻子のよハ按
 たまむ。さきよく峯入へと。貧苦もさうにあといよき。貞女の真心麻子連
 々サとハ是等の事を言ちるべ。却説この山武六。旅よそふハなけれ。先
 村長の家子もき。峯入りのよ。と。届それより村中を家毎くハ挨拶。當年ハ
 びさまで。峯入の為出入つてまなり。志むくの服をこもよとなり。猶も中こと
 ともを頼入なり。と。懇懇ハ演れ。ハ皆相應ハ挨拶して。出行後を指さして。不
 笑者ハありのり。愛ふハ高聲ハ誇り。若有り。旅続もさうになく。古着のま
 の旅。ハ。定て路用もあま。今日より直子門。立一錢づも。を請く。ま。或
 時ハ螺子晝寝をか。子と侍親ハ服たくせ。な人の功德なるゆ。恥と。不知

山伏の女と。謗を聞て立と。ま。恥と。何を言。古着のまの。旅。立。を。た。と
 ぶんもさる。は。我身の。ハ。さ。ふ。め。て。そ。恥。あ。い。れ。と。隣の家
 子。り。る。是。頼。母。き。詞。なり。神職出家。醫者山武士。士農工商。づ。れ。も。道。不。差
 別。り。唯。金。銀。の。ま。き。と。の。恥。と。ま。ハ。ら。む。と。皆。を。ん。の。道。不。習。きを。恥。と。云
 べ。神職。ふ。して。儒。仏。ふ。ま。ま。の。遊。藝。ふ。れ。皇。國。の。古。風。を。不。知。僧。の。寺。の。任。職。と。ハ
 ども。兵。舌。子。ま。の。せ。檀。家。講。中。不。詣。ハ。金。銀。を。欲。堂。塔。を。か。ざ。り。美。服。を。着。り
 婦女の。尊敬。を。う。く。も。經。説。を。習。く。或。ハ。破。戒。醫。ハ。常。子。美。服。を。着。り。を。專
 一。と。富。家。ふ。入。ハ。笑。美。を。含。み。脈。を。と。り。芝。居。を。な。り。不。流。行。役。者。の。紋。を。知
 家。子。在。テ。ハ。衆。方。規。矩。醫。道。重。宝。記。の。か。ち。本。不。眼。を。さ。じ。傷。寒。論。廣。魚
 の。住。君。と。なり。日。毎。ふ。あ。く。の。薬。を。賣。急。病。と。こ。と。貧。家。子。行。の。を。き。と。ハ
 唯。富。貴。の家。子。詣。ハ。仁。術。の。道。不。違。て。多。く。の。黄。金。を。設。く。是。等。皆。愚。俗。の。尊

放まわをよらるべ。笑わらふ取とりきと志しらむ。士農工商皆みなかま。如ごとくは近ちか世よハ有ありまりん。
 昔むかしハ何なにりしと聞きかよべり。金銀きんぎんの多おほきとのとよりしと。餘あま事ことハのつらいと唯ただ。
 貧み乏せきと恥はとらるべ。商あや家の事ことハて餘あま貧み乏せきと好このむらるべ。ハ何なにりしれん。專ま。
 取とりまるべ。道みちの置おきまり。却説さつ山さん武ぶ士し六りく長ちやう福ふく寺じハもき。和尚わしやうハむのみ。當たう年ねんハ峯入いりの心。
 願ねんを發はつす。今いま日ひよりの生なままつつまなりと。接せつ接せつハおまびりる。然しかるべ。當たう寺じの住ぢゆう僧そう。齡れい。
 七しち十じゆハあまり。慈悲じひを旨と。美服びふくを不着まつ。常子じやう恪かく心しんハく。身みの儉けん約やくを專一せんとき。
 實じつハ正せい直ちやくの老らう僧そうなり。山武ぶ士しハ對してへらく。丈せん信しん心しんとハまごろろあり。貧苦ひんくハ勞勞らうせむ。
 道みちを行ひ。峯入いりハ修行しゆせんるを願ねん。是ぜ真まの修しゆ行ぎやう者しやなり。感感かんをべ。去きちながよ。何なに。
 れの道みちハ入るとも皆みなそれくの用よう具ぐ何なにり。用具ぐ調てうべざれ。其法ほふハ行ひ難。譬たとへば勇ゆう猛まう。
 の士しといふ。戦せん場じやうハ向ま。甲冑かうハ身を堅く。手ハ刀鎗とうじやうを執られ。何なにともつく。飲いん。
 敵てきハ勝ん。故世こぜ僧そう常じやう子し。真ま言ごんハ信盤ひん若じやく心しん紅かうを誦といへど。年ねん老らうく。靈場れいじやうハ春。

并ならせんる。かならむ。依之よ修しゆ行ぎやうの用よう具ぐ且かつ略りやく用よう等とうの足たり。たまは是ぜハ愚僧ぐそうの
 寸すん志しなりと。女によの黄金かうごんを差し。せば。山武ぶ士しハ夢のことく。よろうく。事こと。
 限かぎりなく。譬たとへば潜せん龍りゆうの雲うんを得て。天子てん登とう方ほう如ごとく。急ぎ用具ぐを調へ。峯入いりて
 鬼き鳥てうを累下り向むかへ。まる老僧らうそうハ二礼らい。ま。村中むらぢゆうへも執しやく行ぎやうの札せつを配り。是。
 より毎まい年ねん。峯ほう入いりの頃ころハ老僧らうそうより。務用むようの年ねん當たうをかくらる。不定ふていりて。毎まい年ねん。
 とののすりなく。峯ほう入いりを勅り。志のりハ老僧らうそうも。今ハ十餘じよ歳さいとなりて入滅いりめつ。
 才さい子しなる僧そうをして住ぢゆう職しやくとさぐめり。さて此僧しそうハ佞許ねいぎよ子しと。誦事じゆを專。
 一い。甚しん一いき。各各かく晋しんて。人の惡あくをさぐらる事ハ女のく。志しのりハ山武ぶ士し六りく長ちやう福ふく寺じハもき。和尚わしやうハむのみ。當たう年ねんハ峯入いりの心。
 頃ころハもならぬ。長福ちやうふく寺じハ行く。住僧ぢゆうそうハ對して。先代せんたいより年々ねんねん助すけ成じやう子し何なにづの。峯ほう入いりも
 とののりなく。勤め。不相ふしやう替か停てい助すけ成じやうの不。頼たの入いりと。懇懇こんのりハ僧ハこれを。
 聞きく。それハ筋すぢ違ちがひ。頼といふものなり。土家どけ改か門もんハ何れも。信しん家けの助すけ成じやうハ何づの。

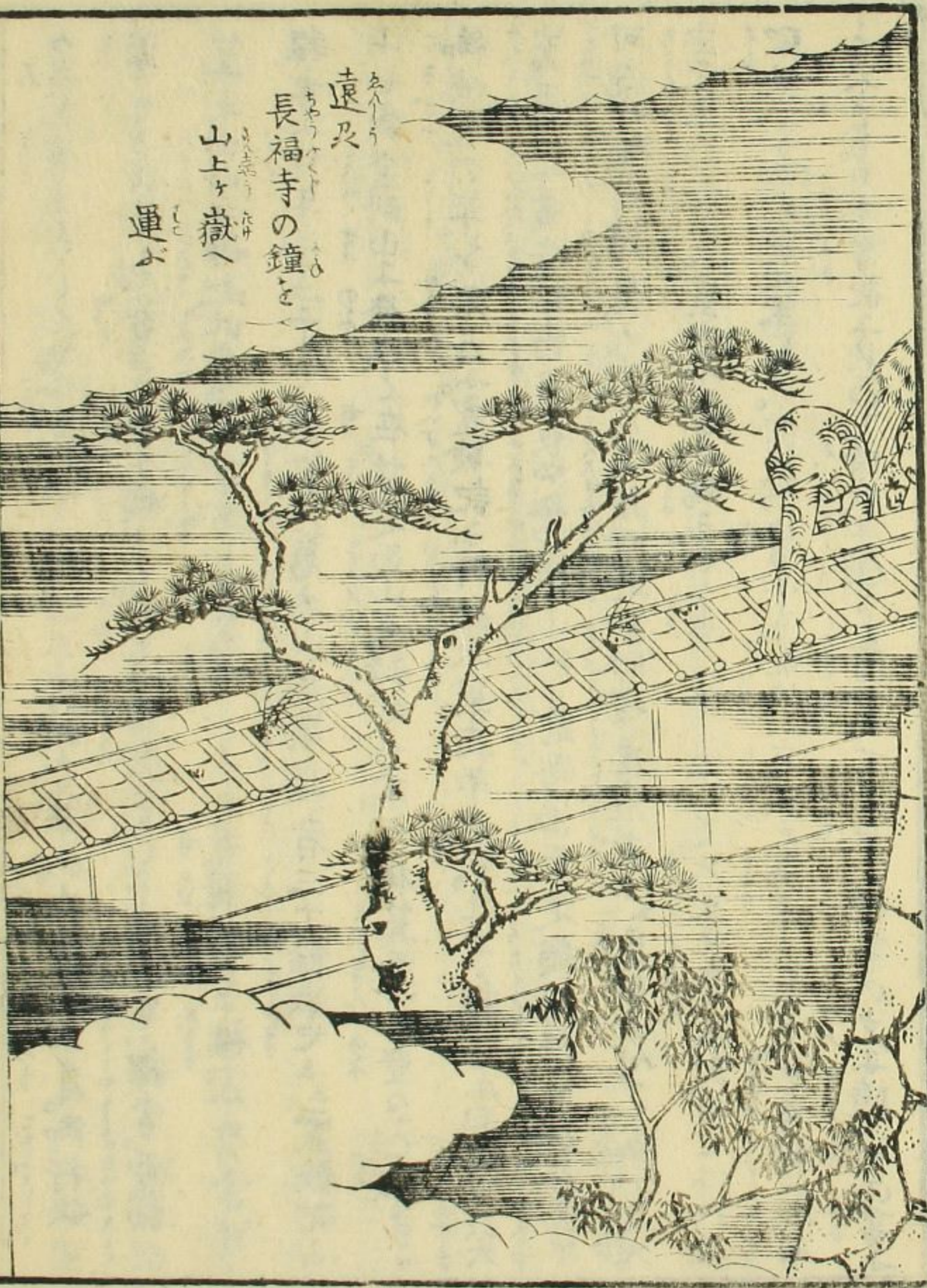
當寺も先代子金も有あり。此頃このころへ金といへば鐘の外の外はなな。若もしこれこれにて用もちまま。
 持行もちぎへへととななりりんん。山武士やまぶしは甚おそろ腹はら立たてて。僧そうはは似にげげなきなき詞ことばかなかなとと外と。
 の方かたにに。鐘樓かねろうを見み。我わが力ちからの有あまま。此鐘このかねはは死しふふかかまま。一ひとのひととと。つつぎぎや
 きて出いでままりり。僧そうはは笑わらひひ。ささててくく大おほききなるなる。虚うつ氣け者もののの事こと。ののちちかか。磬かね行者ぎやうぎやのの力ちから。
 子こもも。天あま杓しやくなりなりととも。鬼おになりなりととも。勝かつ手てなりなりととも。持行もちぎへへととななりりんん。早はや日ひは
 子こなりなりんん。下げ男おとこへ鐘樓かねろうを登のぼりり。つつぎぎよりより。トト。天あま杓しやくなりなりととも。持行もちぎ此この役やくへ免めんりりととのの事こと。トト。
 ままののせせくく入い合あひひ。鐘かねつつききななめめのの事こと。誇こほりり。とともも。山武士やまぶし。我わが家か子こかかへへ僧そうのの要えい口くち。ととも。
 ののくく悪あく。佛ぶつ前ぜんへ盤ばん若じやく心しん経きやうを誦じゆ。夜よももけけぬぬれれ。夜よのの着きものものもも別べつ子こ無む。
 唯ただ其そのままへへ子こ臥ふりりんん。腹はらなりなりとともも。奉ほう入にゅうのの事ことのの工くわい。とともも。ううつつとと。ととりりんん。
 枕まくらののととにに錫杖しやくじやくのの音ね。りりんん。へへ驚おどろろ頭あたまををゆゆりりてて。是こゝろを見みるる。子こ神人しんじん忽と然ぜんとと。
 てて立たちち。山武士やまぶし畏おそるる。とともも。奉ほう入にゅう。子こ神人しんじん告つめめ。當あた年ねんのの奉ほう入にゅうへへ驚おどろろせせるる。

ちちののんん。汝なんぢ不ふ代だいくく。奉ほう入にゅう者ものありありとと。只ただ山武士やまぶし。如何いかなるなる者もののの代しろりりゆゆ故ゆゑとと。伺うかがひひとと。
 夢ゆめははめめくくりり。不思議ふしぎのの靈れい夢むをを蒙かぶりり。とともも。直ただ起たちちてて。身みととききやや。又また心こゝろ経きやう。
 と誦じゆ。居ゐるる。東あづま天てんのの頂ちやう。不ふありありてて。何なにたたぐぐ。門かど戸ととと叩たたくく。とともも。誰たれとと問と。
 子こ近隣きんりんのの百ひやく性じやうなりなり。老らう多た三さん人にんうちうちそそろろぬぬ。昨日きのう長なが福ふく寺じのの和わ尚しやう。甚おそろ不ふ礼れいのの換か換かりり。ととも。
 後のち役やく行者ぎやうぎやととも。誇こほりり。言ことひひ。其その罰ばつ。やや。今いま朝あさ下げ男おとこ。セセのの鐘かねととつつののんんとと。鐘樓かねろう不ふ登のぼ。
 鐘かね木きのの細こ小せうととりりつつるる。つつげげももななりり。驚おどろろててよよくく見みれれ。鐘かねはは。依よ之これ一ひと山やまのの騷さわ動どう。
 ととなりなり。近きん辺べんのの者ものもも焦あせ會あひ。撞つ々つ不ふ評ひやうせせんんとともも。是こゝろはは凡ふつ人にんのの力ちから。不ふ可かしし。必かならず役やく行者ぎやうぎや。
 のの崇たかりり。ちちととんん。僧そうののちちののちち。かかよよ。度たむむ。市いち坊ぼくをを頼たのむむ。役やく行者ぎやうぎやへへ信しん言ごんせんんとと。合あせせるる。
 先せん代だいののととりり。路ちう用ようのの事こと。不ふ及き。今いま度た。別べつ匠じやう。日ひ雇やみみ。心こゝろままかかせせ。子こ信しん銀ぎんととまま。
 べべ。何なに卒そつ奉ほう入にゅうをを頼たの度た。昨日きのうのの過あや言ごん。立た腹はらもも有ありり。とと曲まがりり。美み知ち。預よ度た。吳ご々々。
 もも頼たの入にゅうとと。歎なげききるる。崇たかりりととりり。祈いの禱たのをを頼たのむむ。焼や跡あと。水みづをを置おけけ。たたくくわわなりり。

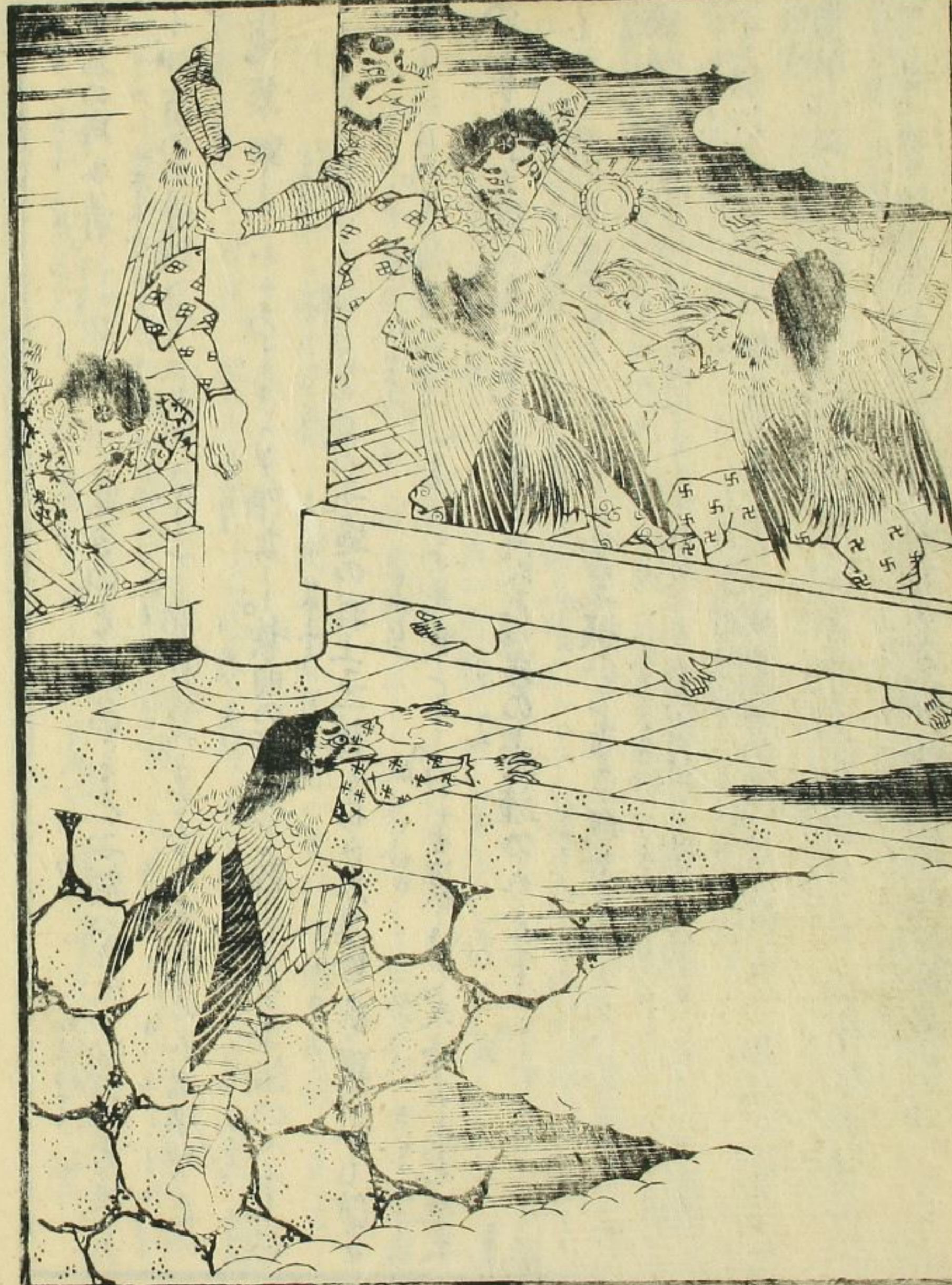
夏世の中の人心轉ぬさきの杖ハ何れの店ハ賣やうん却説山武士頼と聞てよく
 思按。曉の夢不當年の峰ハ勞する事ものれと告あふこそ不思議なる容易
 ふうけい難一と決心一さてく餘ぎなき頼をあれども少しくおとす旨のハ
 請がくと。敢く肯宅依之ちのらあやばむ。立歸て是と語りれば僧ハ大驚
 き。此後如何なる崇りをやよきん命子かまらんと深く心を痛めらるが再び合
 僧倍ち連て。山武士の家不行。再三再四懇勸頭をさけて當年をこどめとして
 毎年峰への午當生銀の事永く相違無之よ一證書亦ても差出さべ一と皆一同
 頼らば山武士も深く思慮して尤もかもしあふハ侍僧も參詣一其
 先達つとさんと云らば一紙子志あるべ一とぞも免らる僧ハ心中小恐一ハおもは是
 北なく先達を頼遠仁國を發足一三河國さうちをぎくして尾張路ふさ
 かり。熟田の宮を伏ねのみ七里のま一帆をあげて是も吹來のや神風の伊勢の

素名の片子着行ハ不どなく追分のとりあのことも額つきて天照神を遙とお
 一伊賀の山道踏分て大和路さ一て急ぎらる。さても大峰ふの不思議あり夜中
 山鳴震動一ておそろ一きり限な一黎明の頃やうく静ふなり。參詣の人々も心
 一ちど登山一て四方を見らる。遙の岩上二鐘をちひたり。皆奇異のおもひさ
 なるにらる。長福寺の僧ハ山武士を先達と一。日を累ひて大峰ふ來り。往來
 のとなくと聞き高き事。十丈ふをひたる。岩の上二鐘ののり一とこをさうく恐
 しく足踏研もかへむ行く見らる疑ひもなき我寺の鐘よりの爰ふと一めて
 慳悋の邪念と捨慈悲の心を生じ。是より真言法を信一。毎年怠りなく峰ふ
 へて修行一。天晴の正僧とハものりらる。鐘懸岩の名ハ是よりた一まること。如是
 靈驗のあつたよりの。のどふふいとまのりらる。後世ふ至く。尊敬彌増よ
 て。去り寛政十年。二十百年の御遠忌よ付。神變大菩薩の勅号をあらわす。誰

長福寺の鐘を運ぶ



遠及
長福寺の鐘を
山上ヶ嶽へ
運ぶ



役行者御傳託置會觀之上

上六

是を尊まざるんや。今嘉永二年八月二十五年。御遠忌月。御行狀の
尊ときよ。著さん事を願ふ。日本書記をよめ。元亨。釋書。靈驗記
箕之面山之縁起。此外諸の書籍を集め。煩きと皆。闕たるを補志のり。元亨
釋書。曰。年三十二。一。桑家入葛木山。居巖窟者三十餘歳也。云。靈驗記。一
十七歳。金剛山。登り。在。箕之面山之縁起。二十九歳。箕面山。登り。在。一
御流罪の年を考り。靈驗記。持統天皇十年。在。元亨。釋書。曰。配豆。大
嶋。居三年。晝守禁而居。夜必登富士山。行道踏海而走。猶行陸。其疾飛鳥不
可及也。黎明歸島。大宝元年。放廻。近京師。凌虚飛去。云。是子。のり。考り。大
宝元年。文武天皇五年。鳴。居。事。三。年。一。大宝元年。か。へ。こ。れ。は
配流。文武天皇三年。何れの書。も。配流。文武之御宇。と。り。如。是。相。違。有
と。い。ふ。も。日本書記。は。り。て。時代。年。歴。を。考。都。て。元。亨。釋。書。の。文。子。隨。他。の。書。子

八異七のべ

後行者御誕生之話

並優婆塞行咒力をとりて一話

大和國葛木上郡。茅原郷。賀茂役公氏。一人の婦女有り。幼きより。父母不孝と生
く。長。國。臣。あ。ら。び。なく。紡績の業も。世。の。と。心。ま。優。艶。一。て。糸。竹。の
道も。音。の。も。額。ひ。ま。き。女。な。れ。バ。遠。近。の。り。迎。ん。と。云。も。多。の。り。ら。ん。ど。も。敢。て。肯。む
常。小。神。佛。を。信。ト。五。辛。酒。肉。の。類。を。き。つ。わ。の。つ。是。を。用。や。り。の。ま。精。進。懇。齋
一。て。比丘尼のごとき。行。ひ。を。な。り。ん。は。是。を。思。世。中。の。伽。強。者。な。り。と。謗。る。者
も。多。の。り。き。頃。八。皇。三。十。五。代。舒。明天皇五年。癸巳三月のり。て。り。し。が。帝。御。遊。獵。の
とき。茅原郷。小。行。幸。り。郷。人。ハ。皆。ぞ。お。み。り。其。後。の。り。ま。り。し。が。女。常。よ。か
り。し。躰。は。見。へ。る。也。西。親。八。易。の。ら。ぬ。に。か。も。ひ。て。尋。り。る。子。女。答。ら。る。ハ。或。夜。の。夢。子

一の獨股杵天降り。口中入と見てさえさる。やもき夢ありと。發馬りんと。他
 言も何とせん。其まにち止ぎらる。腹中常あり。月水も滞りて
 心易のくもと。詠いられ。西親發馬り。かひく聞をも。天堂の摩那夫へ
 佛射の中入と。夢見てより懐任。釋尊をうこめよといへり。賤き身は比
 難らんと。佛のやと。喜事限り。果へも。是を洩聞。皆口よ
 云觸。中小物知り。顔の老人。よを組頭を傾け。深く考へて聞。唐土よ。國王
 の后。暑さを志の。鐵の柱。身をよせ。ひら。つ。あ。孕て。鉄丸をうむ。是
 をとて。二りの。知を作ると。傳。ま。吾。の。近。江。國。入。の。女。の。若。の。り。
 とき。より。積。痛。の。持。病。の。常。小。按。服。して。甚。心。の。ま。さ。る。ま。か。も。ひ。て。何。り。が
 常。あり。ぬ。身。と。なり。月。満。く。人。の。手。を。う。ま。一。倒。も。何。り。彼。是。思。ひ。つ。せ。バ。獨
 股。持。す。て。も。産。ま。り。んと。云。を。聞。く。謗。め。者。ハ。ま。の。り。り。和。説。の。婦。女。ハ。常。あり

も。猶。つ。て。か。り。り。が。か。れ。れ。月。も。重。り。て。十。月。は。満。り。れ。と。も。さ。さ。に。効。驗。も。な。し
 明。れ。八。回。代。六。年。甲。午。正。月。元。日。依。子。産。の。催。り。何。り。て。安。く。王。の。こ。と。き。男。子
 出生。母子とも。健。あり。れ。兩。親。の。喜。び。限。り。な。し。按。む。る。より。産。の。や。ま。さ
 と。八。是。等。の。事。なる。べ。生。生。の。男。子。九。兒。子。何。れ。も。額。子。一。角。を。生。し。面。貌。魁。梧。よ
 一。て。形。體。頗。ら。世。の。人。子。異。なり。依。之。幼。名。を。小。角。と。稱。す。乳。房。を。含。め。養。育。さ。る。よ
 他。子。異。なる。の。甚。ち。す。三。四。歳。の。頃。より。歩。行。さ。る。よ。蠱。虫。を。不。踏。華。を。摘。菓。を。拾
 ひ。仏。子。供。養。し。常。に。食。さ。る。よ。魚。鳥。の。肉。ハ。云。も。さ。ら。な。り。五。辛。の。類。を。き。ら。ぬ。の
 つ。く。食。せ。む。聰。明。敏。智。子。して。小。兒。を。友。と。せ。む。伯。父。兄。の。願。行。と。い。へ。り。人。は。屬。て。物
 學。ハ。ま。る。よ。二。遍。子。して。二。遍。子。を。よ。め。七。歳。の。頃。より。慈。教。の。呪。を。誦。り。日。々。十。万
 遍。子。餘。れ。り。教。へ。さん。と。も。自。密。乘。を。感。悟。し。常。に。孔。雀。明。王。の。咒。を。持。誦。し。綿。人
 の。交。を。禁。し。聖。妻。時。も。怠。り。ぬ。も。く。修。行。は。り。一。六。兩。中。歩。行。さ。る。よ。衣。を。ぬ。ぎ

志。是等を不思議と云べきなり。常ニ賤愚の應答をきくもの。咒を持し經を誦り
 子巻のまゝ。例セバ龍ハ諸虫より。諸虫と鱗牙をなぐさむ。獅々棋麟ハ諸畜に
 諸畜と脚躡と連るも。友を撰と云り。人ハ万物の長なるゆへ。心をとつて。友と
 己とをむむと。かむつ。友を見よし。行者賤愚のまど。つらむ。なむ。と。いへど
 巻のまき。心をもつて。友とむるゆへなり。是も。凡人の。いざ。を。ある。べし。又
 歩行する。額ニ帽子を。何て。角を。せむ。是より。つて。角帽子と云。木履と。ききて
 不浄と。踏。錫杖と。振虫を。返ひ。まこと。勇猛精進なり。家子。つて。頂髪を。と
 不剃と。つて。餘。皆。比丘僧の威儀の。如く。五事を。断む。一。肉食。二。五辛。三。飲
 酒。四。婬。五。不浄の家子。食せむ。是を。優婆塞行者と。は。と。い。は。む。後
 世。至。て。八神。變。大菩薩と。教ひ。海。子。佛。徳を。權。多。神。仙。あり。仏。人。界。へ。生。を。う。け。衆
 生を。仕。度。し。ま。つ。の。か。み。と。い。へ。ど。も。父。無。り。て。生。れ。たる。其。例。を。聞。む。予。是。を

愚按。まろ。子。仏。祖。釋。尊。ハ。久。遠。の。仏。な。れ。り。中。天。竺。摩。迦。陀。國。如。毘。羅。城。淨。飯
 王。と。父。と。摩。耶。夫。人。を。母。と。して。生。れ。り。古。朝。ハ。聖。徳。太子。故。世。觀。音。の。化
 身。と。い。へ。ど。も。人。皇。三。十。二。代。用。明。天。皇。を。父。と。し。穴。穗。部。皇。女。を。母。と。して。生。れ。り
 後。世。ハ。讚。及。多。度。郡。屏。風。浦。の。領。主。佐。伯。貞。氏。の。妻。阿。加。氏。と。い。へ。人。或。夜。金。色。の。僧。來。て
 曰。我。ハ。西。天。の。僧。なり。宿。縁。百。子。より。て。汝。胎。を。あ。り。と。口中。み。入。と。妻。見。て。より。懐。妊。し
 頃。人。皇。四。十。九。代。光。仁。天。皇。の。御。宇。皇。龜。五。年。六。月。十。五。日。生。生。如。名。真。魚。と。稱。を。弘。法。大。師
 是。なり。淨。土。門。の。祖。師。法。然。上。人。美。作。國。之。采。南。条。稻。岡。小。生。生。也。父。ハ。保。間。時。國。母。ハ。秦。氏
 也。夢。子。割。刀。を。吞。し。見。て。より。乃。子。て。人。皇。七。十。九。代。崇。徳。院。の。御。宇。長。養。二。年。四。月。七
 日。子。生。方。勢。至。菩。薩。の。仕。身。なり。法。花。宗。の。祖。師。日。蓮。上。人。房。及。長。狹。郡。東。条。々。市。川
 村。小。倭。子。生。生。也。入。貫。名。三。郎。重。忠。母。ハ。梅。千。代。と。云。重。忠。夢。子。虛。空。藏。菩。薩。空。中。子
 影。向。あり。顔。よ。き。靈。兒。子。を。尊。み。ま。へ。女。子。あ。り。一。切。衆。生。の。為。上。求。菩。提。の。因。縁。三。世

常恒の大道士ありとてさづけ手と見たる。母は比叡山の頂子腰をわけ。近江の湖水
 子手と洗ひ富士の峯に日の蓮小のりて土をちかぐ。其日の口中子入し夢見てあり孕
 人皇八十九代後堀川院の御宇。貞應元年壬午二月十六日生れ。本化上行菩薩
 如是仏の化身といへども何れも父母あり。是人累生をうくるの例なり。地水火風の
 四つのもを色と云。空の一つを心と云。色心相合して人とする。心の二つは神仏の授けを
 とも。地水火風の色は号するもの。父母無く何者り是をちかぐ。あつ死するるときは父
 風の二つは心よつて去とも。水土の二つは残り止る。是をちかぐもの。父母あり。又母
 の作り色ありせば神仏心を授けぬ。是を色心相合の躰といふ。依之佛祖釋尊を
 とどめ。神仏の推化といへども皆父母あり。志のよは後行者むくのり。父より一と
 ぶる。深く考へべき事なり。是は一説あり。舒明天皇茅原のさと子行幸。鷹
 を放ちて御遊りし頃。行者の御母は二八の春をむむ。艶色十分して弥よ

な。ばの花よりもな。ば。たをやりなり。ば。帝近くめ。て。深く愛もするあり。り
 然れども唯一度の恩幸を蒙りて。な。ば。深く慎みて。御座よりといへん。り
 畏も。獨股杆天降りて。口中入夢見。と披露せ。ば。深き心あり。たとへば。後世
 一休禪師。公皇百代。後小松院の御座。りて。御母。藤持。後とへん。人。な。と。む。藤
 持。従。八國母。通明門院。子。奉仕。女房。なり。しが。通明門院の御座。の花。盛り。ふ。て。係。不
 花見の宴を催し。あ。ひ。帝も。行幸。し。あ。ひ。御酒宴の。真。を。催し。あ。ひ。る。ふ。藤持
 従。優。艶。ふ。て。糸竹の道。ふ。も。勝。れた。ん。深。く。め。ぐ。せ。あ。ひ。其。夜。恩。幸。を。蒙
 り。と。い。へ。ん。も。容易。な。ら。ざ。ん。事。や。秘。く。生。生。の。御。子。八。出家。させ。後。ふ。八。天下。の大。徳。と。な
 り。あ。例。も。あり。行者の。御。事。た。り。ふ。天子。の。御。落。胤。や。と。不。書。頭。と。い。へ。ん。も。御。高
 徳。も。か。む。ひ。あ。せ。く。も。知。へ。き。る。な。り。行者の。御。母。清。淨。堅。固。の。御。身。不。御。胤。と。や
 と。あ。あ。佛。心。を。授。け。よ。る。べ。し。行者。八。七。生。の。前。より。仏。も。く。三。國。子。生。れ。衆。生。も

及行御身已固命生

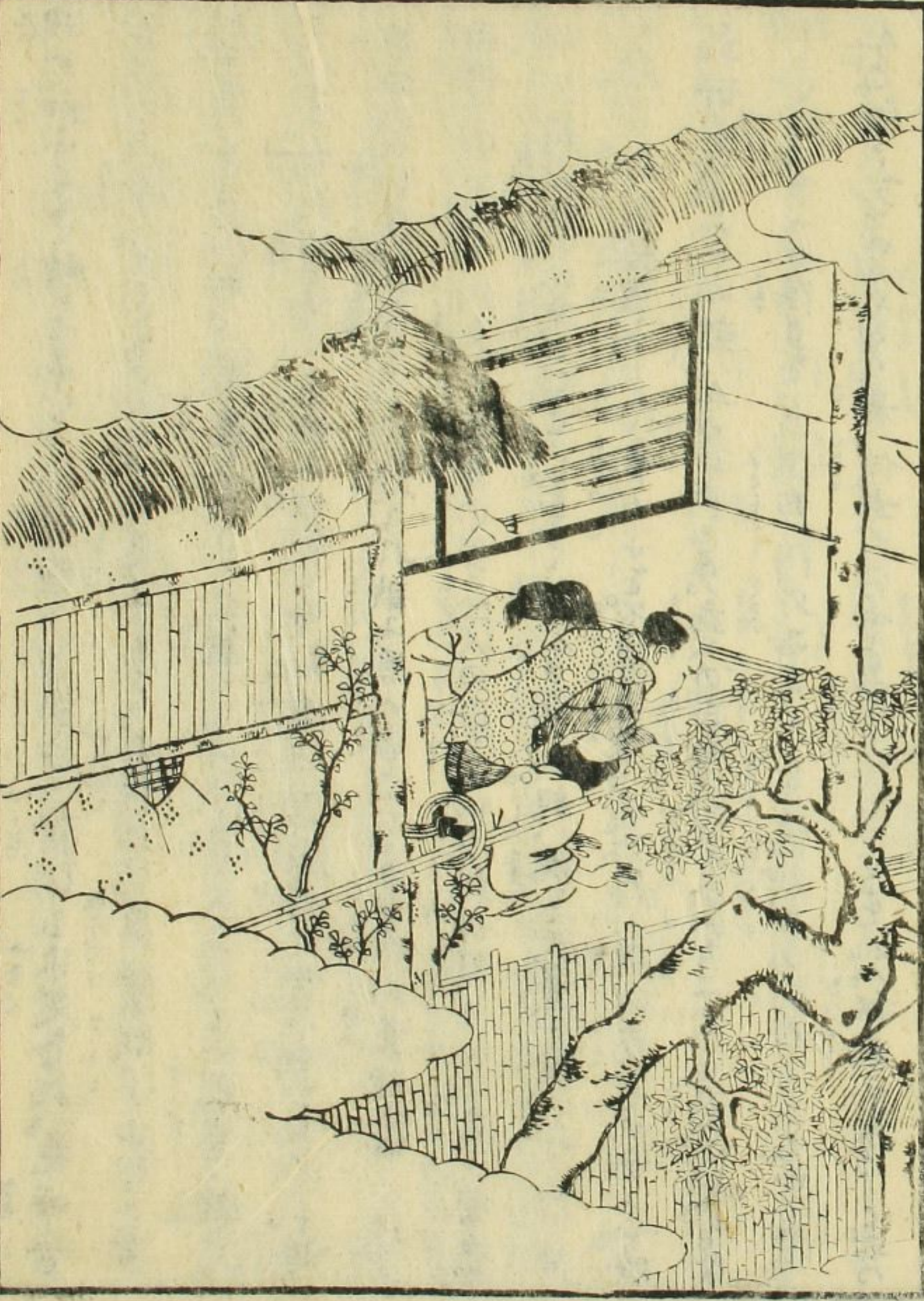
三十一

化度一毛。其七生の訣ハ次の巻より見たる事。見ルべし。又云額一本の角有
 然れども。角の首ハ鬼のやうにて。賤きまぐことおしひて。あきやうに云ふ。たのひ
 甚しきやまう也。神農の像を見ル。角有り。又古書ハ人身牛首と見え
 是を賤といふ。諸神の中ハ角有り神も有るべし。志あれども。神像と画
 稀なる故知人。行者一本の角有り也。御名を小角と称す。天竺摩伽陀國ハ
 一人の論師有り。名を提舎と云。其妻を舍利女と云。眼舍利鳥ハ相似たる也。
 名づくといへり。其子と舍利弗と云。是等の例なるべし。角百也。角帽子を用
 今山伏の頭巾を用ハ義。行者之の代ハ毛トまるなり。帽子とハ頭ハ
 かくとも。頭巾なり。黒く塗る。めたるハ鳥帽子と云。是ハ形鳥ハ似たる故
 ち。角帽子と云ハ角かくなり。是をいふも。角有。疑へき。よめり。む
 ま。角有り。恥へき事。今も遠國ハ女の用ハ帽子を角かくと

云所も有り。是ハ行者の用ハ毛ハ古言の残り。よるべし。却説行者ハ修行怠なく。年々
 累心。今ハ天眼通を得。居よ。百里の外を知り。心中の善悪を見貫
 ま。病症を觀ふ。老醫もあぶべの。志のれども。却て是を誇り。母ハおたの
 き。勉強者なり。信用する者。さうになら。まことハ深山櫻のごとく。我よ
 り外。老人ども。石中の玉とやい。例も。曇ん。鏡。うつ。如く。愚倍の眼
 晋。行者の正行を見。力強く相僕を好。又力談などに勝。慢心。里人
 よ。年の頃ハ二十三。四。力強く相僕を好。又力談などに勝。慢心。里人
 を眼。下。見。く。だ。傍若無人。無頼者。然れども。是ハ敵。者。者。ん。ん。よ。き
 事。思。ハ。大。酒。の。後。ハ。喧。嘩。と。好。北。道。の。振。ま。あ。な。人。を。な。や。ま。是。を。ホ。と
 する。惡。黨。を。り。し。が。或。時。大。ハ。小。醉。で。唯。獨。り。夜。も。深。く。な。り。山。路。を。か。か。り。が。月。さ。へ
 て。晝。の。ご。と。く。な。り。れ。ハ。一。匹。の。狐。を。見。て。是。を。殺。し。食。つ。や。と。思。ハ。石。を。ひ。ろ。お

て擲たり。狐ハ尾のさきをうくれ危きを逃れ去んとす。作磨呂ハ残念なり。追
り三下をり。狐ハ高き岩の上小飛のり。作磨呂をかり見の。其眼中先くを
放ち。尋常の狐よりさ。作磨呂女も恐ろる。まゝ石をひたこんとす
り。狐ハうりくとまきて。道の谷へ飛つて。まがく見へ。作磨呂ハ腹たちと。さて
もく。命更加のあり。狐のまよ。つばやまのり。我家よりへり。臥戸今寝入
る。家内の者ハ狐の事をまよ。心とま。朝を名く粥などたき。うちありて食せ
るといへども。作磨呂ハまよ。臥戸まよ。ぐされ。父ある者ハ高き。やよ作磨呂よつ
ちく吞まご。朝寝をり。とすとどろ。今日。田植く。いそ。早とく。早
と云らん。作磨呂ハ起らり。走り。上座よ。つき。父小む。わの大音。上よ。女よ。聞
作磨呂ハ。少。き力を頼り。て。喧嘩を好。非道の振舞。ま。く。ま。の。と。ま。種
の悪業。常。悪。と。か。も。も。我。か。ら。ぬ。事。な。れ。は。是。ま。で。ハ。ち。り。た。れ。と。も

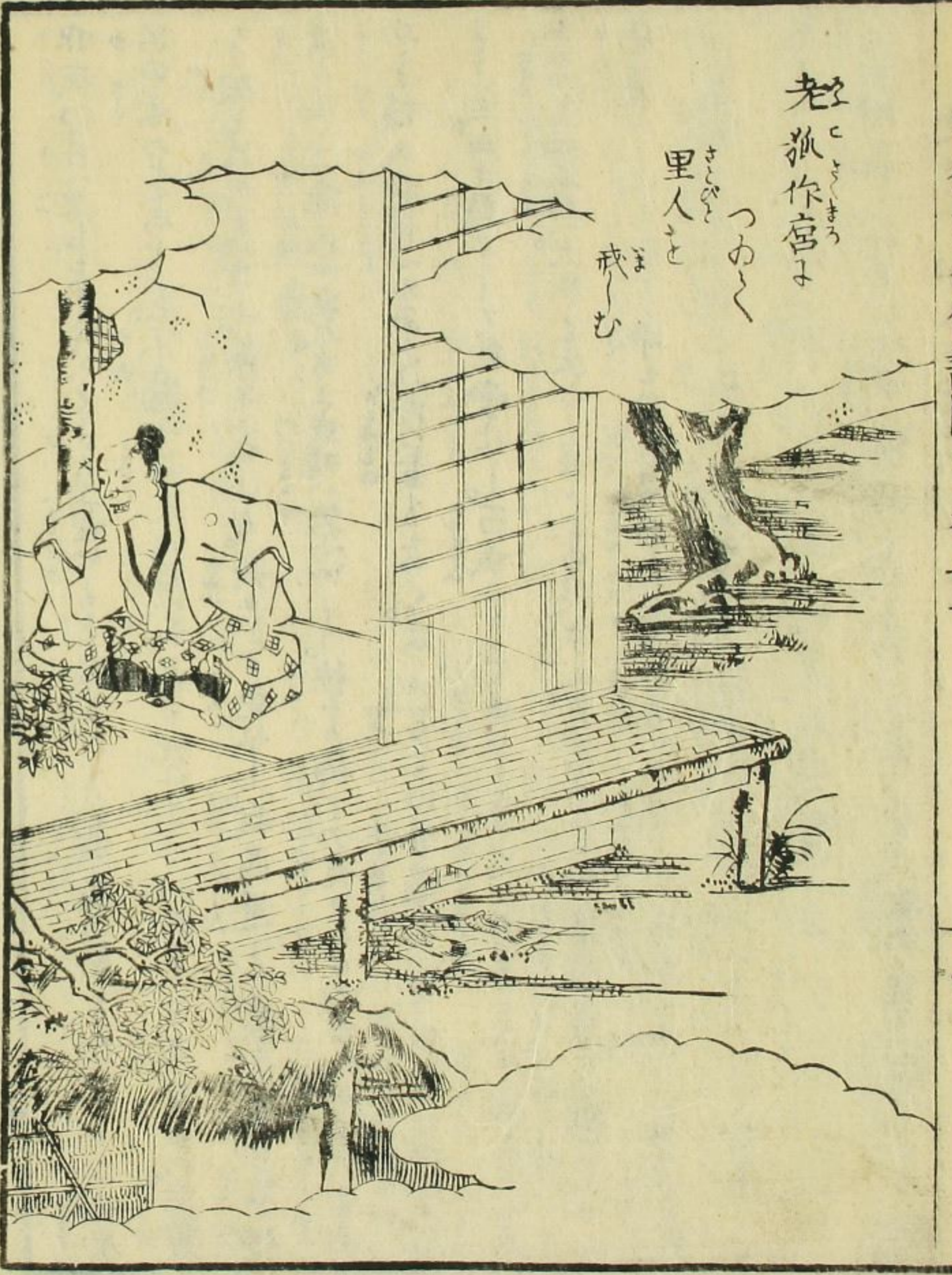
昨夜の月ハ隈もあ。く。甚。心。よ。き。事。も。か。も。我。身。の。影。を。た。の。り。て。作磨
呂の末。り。と。あ。ら。む。不。意。に。飛。来。り。百。六。我。尾。さ。た。あ。ら。今。五。寸。高。か。り。せ。陰。裏
を。破。ら。れ。死。ま。さ。き。尾。先。の。り。危。き。を。免。れ。我。高。運。と。云。ま。さ。り。年。経
其。うち。小。獵。人。に。返。れ。ま。或。時。矢。の。り。種。々。さ。は。く。の。危。き。と。の。ん。百。三。十。年。の
功。も。積。大。和。國。み。あ。ら。恐。ろ。者。も。あ。く。ま。の。多。く。の。眷。屬。も。あ。ら。狐。の。の。は。の。定。め
として。五。十。歳。子。て。能。變。化。百。歳。子。て。美。女。と。仕。人。の。女。を。ま。さ。千。歳。子。て。天
小。昇。て。神。子。は。天。狐。と。云。く。身。と。あ。ら。ま。さ。き。あり。志。の。り。作磨呂も。ど。擲。た。ら。ら
眷。屬。ど。も。へ。恥。べ。き。事。の。暫。此。家。止。り。女。等。を。惱。て。楽。ん。と。あ。ら。ま。は。日。是。ハ
子の悪事ハ。親。下。ま。と。云。べ。後。ま。の。り。唯。一。の。男。子。よ。ら。幼。き。あり。子。の。言。ま。り。小
養。育。一。人。の。道。たる。教。も。あ。ら。ま。成長。の。其。後。ハ。相。僕。ハ。勝。と。悦。び。く。それ。の。り
は。々。増。長。一。社。道。の。喧。嘩。ハ。勝。さ。へ。も。心。し。い。一。親。の。道。ハ。違。ハ。ぎ。り。致



老狐作宮子

里人

つわく



例せ八畑よき種をまきとも耕作もなせむ養ひし不足なれば花咲實
 せむは事なきをくまののべり。育子よよく善悪あり。眞實我子のかりき
 せとあらざるふあつむ道をおしぬ親こそ道よ晋きなり。子の悪業親のつ
 る。うち免れ有まると狐子似あつぬ勸善懲惡家内の者ハ云ふあよむぞ隣
 家の人々仰天。恥入てことひのりれ誠は歎けぬことごとく。其詞眞理よけり
 後世是のごとき例多し。富貴の家は二人の愛子あり。乳母側女伽の者大執事
 副公家大名の公達のごとき。たまははききと聞ハ西親ハ魂を天邊に飛し。下女下男
 をも呵り白言。言儘ふりて育の子を暑の頂上。六月土用の丑の日よとを撰
 乳母ふらせ。西親ハ手足をとろ。立入の按摩ハ小兒の背子父と置。小兒ハ母
 しくあつきり限りなし。泣声門外ふきこへ焦熱地獄の苦り。ことかやう
 んとおもふごのりなり。是ハ何せむやと問ふ。父治をまれば無病よありと。きつ

おへなりといへり。聖賢の道を教へてハ善道小入と。貧不どよあひあふ。おへぬ
 親はらうまじく。よきふを教へ。よき者よありと。あつぬ者ハあつれども深く
 あると。浅くあつるとの甲乙あり。例せば玉の孟小。諸白の上酒をとり。見らふ借け
 れども。と一屎の白ひ。ぬりまてもあつらば吞者なり。是ハ不浄なりと。深く知る
 也へなり。都て深くあつれ用をなす。浅り用をなす。極樂往生を願ひ。念佛
 を唱らふ。常よとあつらふ用きたる。臨終の唯一べん。念佛よこそ用あれと云
 ちのつ。常ハ唱へざらばよき歎とふも。ばさにあふ。寝ても記ても唱らふ。ば
 常よとあつらふ。深くあつらむ。怠りなくとなす。念佛の功を積。臨終の唯
 一遍がよくてきりあり。是ハ不折誓古して。深くあつらふ心よまよひなく。無量の功德
 あり。是を安心と云ふ。志の。念佛の功德ハ眼前より。とれ。早く見
 んとあつらふ。待留理の統る古とらふ。常ハ執古足され。床よあつらひて。声の調子を

損えんむらる事ことなり。是これ統たう古この不足たふ也なり。親おやの心こころよよままるるをを深こくこららんん子この教かみへへららききががいい。見み原はら篤とく信しん翁うんの著しよされる。古こ書しよの意いををののままががききせせ一ひと丈ぢふふ。百ひやく萬まん錢せんををいいてて。女むすめ子こをを嫁かせせ一ひとむむららるるをを知しるる。十じゆ萬まん錢せんををいいてて子こをを教かみゆゆ事こととと思おもふふとと在あらら。誠まこと子こ尊たうむむきき言ことなりなり。狐きつひの詞ことば此こゝ意いののままなりなり。大だい和わ國こくゆゆ源げん九くわう郎らうの放はう又また源げん九くわう郎らうの先せん祖そなりなり。放はう予よ是これををああららむむ。づづれれももくくれれ。老らう狐こ其こゝにに。狐きつひの理り解かいふふゆゆはは皆みな口くちをを聞きここふふ顔かほをを見みるる。ひひののたたるる。貴き人にんの御ご前ぜんにに出でたたるる。世よ作さく磨ま呂りよいいふふ座ざををままりりみみ。席せきををいいてて曰いくく。先せん今こん日にちののととままりり。眷けん屬そくとともも。おおままきき故こ米せき三さん斗とをを赤せき飯はんととしし。隨ま分ぶん小せう豆とうををままくく入い生せい魚ぎよををととへへとと出でせせ。一ひと鯛たいももててもも。くくりりかかししとと好このいい。流りゅう石せき大だい和わの狐こなりなり。是これよりより狐こののつつままたたるる。村むら中なか奇き合あ相あ談だんしてして好このののままにに。米せき三さん斗とをを赤せき飯はんととしし。生せい魚ぎよををままくく。作ま宮みやの前まへににままりり。いいづづせせはは是これハハ我われ食たままりり。眷けん屬そくとともも。へへつつりりままちちのの早さ々さ谷や間ま持もち行ぎやう。清せい淨じやうなるる。秀しゆとともも。

置おけけとと。云いふふままああせてて。山やま中なかににままりりててせせらら。かかくく其その日ひハハああつつままりりれれどどもも。ああららんん翌よく日にちもも早さう朝あさよりより。油あぶらああげげののとともも。三さん百ひゃく。小せう豆とう餅もち五ご百ひゃくとと好このりり也なり。父ちちのの老らう人にん太たいひひ子こ當あ惑まど。日ひ々々如ごと是ごと大だいととよよなるる好このみみてて。此こゝ瘦しゆう身しん上じやうの中なかへへ及およぶぶ。及およぶぶははいいづづれれもも。併あひひががらら。今こん日にちをを限かぎりり。退ひききままりり。好このままああののせせんんとと云いふふ。作ま呂りよハハ笑わら美みををままくくてて。いいららしし。退ひききままりり。近きん隣りんのの人にん々々をを頼たのみみ。餓うののままりり。ささてて油あぶら屋やにに行いくく。子こ細さいををままりり。かかぐぐりりれれ。中なかににままりり。大だいおおどどろろきき。ささててももくくききののととくく。十じゆ万まんなるる。かかななはは心こころ痛いたむむ。不ふととききつつ。いいららなりなり。隨ま分ぶんののんんれれ。上じやう品ひんををままくく。比ひ常じやうよりより下げ直ちやく下げささ。一ひと上じやうととよよままべべ。はは豆まめ留りゆう中ちゆう八はち相さうああららむむ。巾きん用よう仰おほせせらられれ下くだささんんべべ。とと我わ身しん勝か手てふふ。蒼そうららるる。ささててもも日ひ役やくのの項かた子こののりりてて。中ちゆうりり。調てうひひりりれれ。ままああ。昨きの日にちのの所ところへへままりり。老らう人にんハハ我わ子こ作ま呂りよににむむららるる。約やく束たうのの如ごとくく執しやく事じののりり。いいたたれれ。早さう々々退ひききままりり。放はう否ひとと云いふふ。作ま呂りよハハ大だいいいふふ。立た腹はら。親おやととししてて。子こをを追おいいふふ。ままりりととままりり。行い先さきへへままりりれれどどもも。何なに國こくへへ

ありとも。出行へーと走りてせ。老人ハ周章ひきとめ。故に出行と云ふ。非
 狐ふこそへまゝなりと云々。作宮ハ増長。種々の好まなり調ひ
 流ぶ。カハ日頃十倍。中くとめ難く。村中うちり設合。一。呪ひ祈禱
 ハ。よかよき。老若男女の差別なく。智慧囊の底をたたくも。元來無
 智慧のつぎやうなく。困りつづの中。二人。急と思ひ付。つひに
 一同。耳聾。其謀ハ。あよと向ふ。答るハ。役優婆塞ハ。世中の勉強者。人
 まで。いりさへ。ぬ者なれども。近頃ハ。不思議あり。まきす。もきん。此
 子頼。呪まで。祈禱。まても。まのせ。行さば。万。の験も。何。んと。二人。手
 う。つ。曰。其事。我も。つ。ぬ。ま。ゆ。ら。む。此。頃。河。内。國。あり。眼。病。の。者。を。連。れ。來。り。加。持。祈
 禱。と。頼。し。七。日。の。中。み。手。の。筋。を。見。分。や。ま。り。と。き。ん。り。又。律。國。より。若
 き。女。を。連。れ。來。り。何。の。病。ひ。も。つ。ひ。と。し。是。も。全。は。一。た。り。と。云。今。入。八。都。の。人。十

年。い。來。の。病。なる。も。全。は。一。たり。と。云。凡。皆。二。同。み。詞。を。と。ろ。へ。それ。を。ま。ら。ぬ。何。事
 と。や。燈。臺。本。音。一。と。是。等。の。り。なる。一。ま。其。う。へ。よ。き。事。ハ。一。の。謝。礼。し。う
 け。ぬ。と。聞。是。最。上。の。祈。禱。なり。と。欲。と。連。立。里。人。と。も。一。合。せ。て。五。六。人。と。も。連。て。了。衆
 出行。り。さ。て。も。行。者。の。定。み。や。も。き。常。み。か。つ。り。て。慇。懃。ふ。作。宮。の。事。も。や。の。親。類
 一。統。の。願。なり。何。と。ぞ。御。祈。念。下。され。度。と。頼。り。行。者。ハ。日。頃。の。不。礼。惡。一。と。な。不。一。め。せ。ど
 も。と。ろ。み。不。足。り。下。賤。の。者。猶。ま。た。難。を。救。ふ。心。願。な。ら。ば。早。速。に。兼。歩。み。其。家。子。行。く
 祈。禱。せん。と。ど。も。く。ら。へ。と。と。仰。を。聞。て。里。人。と。も。收。び。勇。て。か。へ。り。ん。り。さ。て。も
 作。宮。が。家。子。ハ。村。中。う。ち。奇。不。淨。を。と。ろ。ぬ。行。者。の。來。ま。よ。を。ま。ち。う。け。たり。行。者
 ハ。御。身。へ。白。携。の。淨。衣。を。め。一。額。子。角。帽子。を。あ。て。木。履。を。ま。き。左。の。手。子。獨。股
 杵。と。持。右。子。錫。杖。を。振。り。作。宮。が。門。ふ。く。い。ま。ハ。家。内。の。者。ハ。周。章。迎。み。出。ま。り。行。者
 志。づ。く。と。一。て。家。内。子。入。ん。と。一。ま。ハ。作。宮。大。ひ。子。驚。き。卧。戸。の。内。子。走。り。り。堅。く。戸

とナリ身と歪め須更行者の御入を留奉れと云らんバ村人どもハ一同よきて、
 行者子恐れたるも早御入を願ひたるも行者是をきこしめ。言こと何しげ
 言置て立去べ。願子仍て出の猶豫ハ免れまると仰子漸作石八頭を何げ永
 く此家をも惱さんとかもひীগ。行者の御入と何んハ行時も亦難し。今より直子
 退くなり。我百三十年の其間道をも晋ま一人を述し又或時ハ異類異
 形子身を變じ。婦女をも敬馬し。千變万化せるといへども人の身は執り
 たるのなり。作店ハ常々悪業をなすも神佛の守なり。我又是を惡
 しとかもひ。身子今々悩まなり。幸のれども行者の本多ふを見れば恐ろ
 き。この間も厭ふなり。汝等行者子咒力ある事をあしむ。却て正直の行を
 誇り。世の中の偽強者と云ハ甚愚なり。我ハ畜生あれども。通力を得
 き。者ものよもの。行者の尊きを志す。今退くよつゝあつゝハ。汝等がためよ

行者の功德を言きあさん。謹ぐようけたまふ。抑後優婆塞行者
 ハ七生の其むりより佛まで。今此里ハ生れあふ。かごけあくも。天子の御
 落胤あるよあつゝ。衆生を化度し。あらん為佛の御霊をさづけあふ。凡人ハ
 雨の中ハ歩行しあふ。御身のぬれざるも。油のつよき生れつきよと。已
 心の乃ばぬさとして。是を誇りハ愚なり。我ハ幽冥の者なるよあつゝ。是を
 見つゝ。常々四天王天蓋を持って守りあふ。是もも權化あつゝ。知
 へき。尊と一とはあひます。詞を工ふして。誇り事。言詰り絶たる。頑愚の土
 民ハ。女等が事なり。我ハ今より退くなり。云と見へ。其ま。子作
 店ハ。倒卧死たる如く寝入り。一偏ハ行者のあうげなり。村中。奇異のかも
 ひをな。今までそり。者までも。敬ひ尊る。行者の何と。か
 が。かり尊るとき。生佛外の村ハ。有ま。と。誇詞を翻。自謾詞ぞ可笑

凡人。是より行者を尊敬し。神と云ま。佛と云も道理なれど善と云へ神
 佛。惡といへ。鬼ありと。よき不どま。下賤の癖。尾は緒をく言觸し
 近郷近里ハ云ふ及む。遠近の國々までも聞へる。天口より人をして云
 一むらと。是等の事ならん。行者の御徳日々益し。傳へ聞たる人々
 貴賤の差別なく群参して。加持祈禱を願者あり。神佛の罰を蒙
 或ハ難病惡靈の祟り。種々の難苦を願ふと云ども。一人として苦惱を免れ
 其數幾千人といふ。行者の呪験ハ神の力と敬ひ
 尊し恩謝のため。金銀巻物山海の珍味日々持運事山のごとく。寶の山よ
 入とハ此のなるべし。志のれども行者ハ一品も請たぬ。返ハ人々
 頭ハ依く虎高く。豊子鼻を摺りて。冥加の爲の寸志あり。何卒御請納下
 されたと。同音願ひ及ぬ。行者聞し召さん。さすと云思ふ志を。其ま

返も破戒に似たり。汝等が心むのりを請かりん。是へと仰りり。我劣
 一と珍物奇者。と云らせま。と云ふべし。是をとり揚ぐ。熟覽
 心も盡せ。品々我心も満足せり。早持歸れと。差戻し。皆々互顔
 見合のまの。無末の品も。何れも御意よ。何れも御意。何れも御意。御差圖
 一だの奉んと伺ひり。左ハ何と。又上品下品。好悪も。何れを見
 ても皆平なり。唯喜ハ汝等が志あり。品を止て。せん持かへ。下と品だよ
 一と請たぬ。依之ちか。およ。神や佛。備へ。物を直會。たの如く。よて
 皆々とも。歸り。是のり。日々夜々。願ふもの。絶た
 又咒験を蒙り。危きを免。者數あり。と云ども。先ニテ條を。日と
 中も。何内國倉造りと。何所。各を勸意と云老人。其家の富り事
 近郷。田畑山林。も。召つ。男女も。が。二十人

阿まる大家あり。此家二人の男子あり。名を善見と稱へり。成長よき。このの孝心
 かりく父母よつへの。一も逆事なく。物學びるるを。楽と一。身の行狀正
 直よ一。年八廿三四よ一。て美男なり。懸想する女も。あかりき。中も善見
 が側女。名を阿古とよび。と。あめく。き女あり。此者。同村の百姓の娘あり。ら
 幼。て父母よ。かれ頼。のき。身。と。なり。し。を。勸意。びん。あ。の。十。歳。の。頃。より
 我。か。へ。ひ。き。と。り。て。養。ひ。育。て。一。が。鄙。の。生。れ。よ。ま。れ。よ。る。や。さ。き。女。なる。也。側
 近く。召。つ。ら。ぬ。今。年。二。三。歳。は。な。れ。ど。も。耕。を。業。も。あ。つ。ら。なく。唯。奥。向。よ。在。て
 絳。績。の。もの。し。て。勤。一。が。よく。恩。を。知。る。者。よ。て。か。げ。ひ。あ。なく。仕。へ。ら。ぬ。也。へ。勸
 意。も。憐。こ。て。め。一。つ。ら。ぬ。り。善。見。は。い。ま。づ。妻。も。なく。何。れ。と。阿。古。と。一。て。例。な
 り。ゆ。を。ま。か。あ。つ。せ。ら。る。よ。懸。念。も。懈。怠。も。なく。仕。へ。ら。ぬ。也。へ。其。實。跡。なる。也。際
 く。感。一。愛。も。い。れ。ば。女。も。ま。ず。實。情。の。深。き。を。よ。ら。て。び。互。の。感。も。通。一。鴛。鴦

の中とは。ち。の。り。り。り。忍。び。違。り。百。度。も。な。よ。ひ。れ。れ。ぬ。も。憤。こ。さ。の。り。れ。ば。知。者。さ。ら。に
 一。志。の。れ。ど。も。召。つ。の。下。女。な。れ。ば。妻。と。せ。ん。よ。ハ。の。免。一。も。あ。る。ま。一。ま。親。親
 縁。者。へ。の。憐。り。も。あ。ら。ば。喜。出。一。か。て。く。忍。び。て。ま。い。く。ら。つ。ら。ぬ。と。か。も。ひ。諸。方。も
 中。來。り。縁。談。へ。事。を。た。右。よ。よ。せ。何。れ。ら。し。こと。ら。う。よ。か。あ。ひ。れ。れ。ば。父。の。勸。意。へ。忍。び
 女。の。首。と。腰。一。も。し。ま。く。と。早。く。志。す。一。づ。き。縁。を。と。と。めて。家。督。を。讓。や。り。て。種。々。子
 心。を。等。一。ら。ら。ふ。今。ま。い。の。り。あり。同。里。は。富。貴。の。家。あり。勸。意。が。家。に。成。一。あ。れ
 ども。他。は。稀。ある。家。の。り。に。て。一。人。の。女子。あり。台。と。子。良。司。と。稱。り。今。八。二。八。の
 春。も。ま。だ。艶。び。や。ら。ぬ。り。の。限。り。な。し。兩。親。ハ。半。裏。の。玉。の。如。く。寵。愛。一。諸。方。を。教
 行。せ。正。一。ら。う。て。養。育。する。よ。一。を。聞。勸。意。好。も。一。する。よ。か。も。ひ。一。入。の。者。の中
 賢。き。を。と。り。て。内。意。を。問。せ。ら。る。勸。意。が。家。へ。近。郷。よ。ら。び。な。く。ふ。善。見
 の。實。跡。正。直。なる。の。も。聞。あ。よ。び。た。ん。ば。早。速。相。談。も。を。あ。ひ。た。た。え。一。答。ら。る。也。へ

行々神代傳言置合はせし

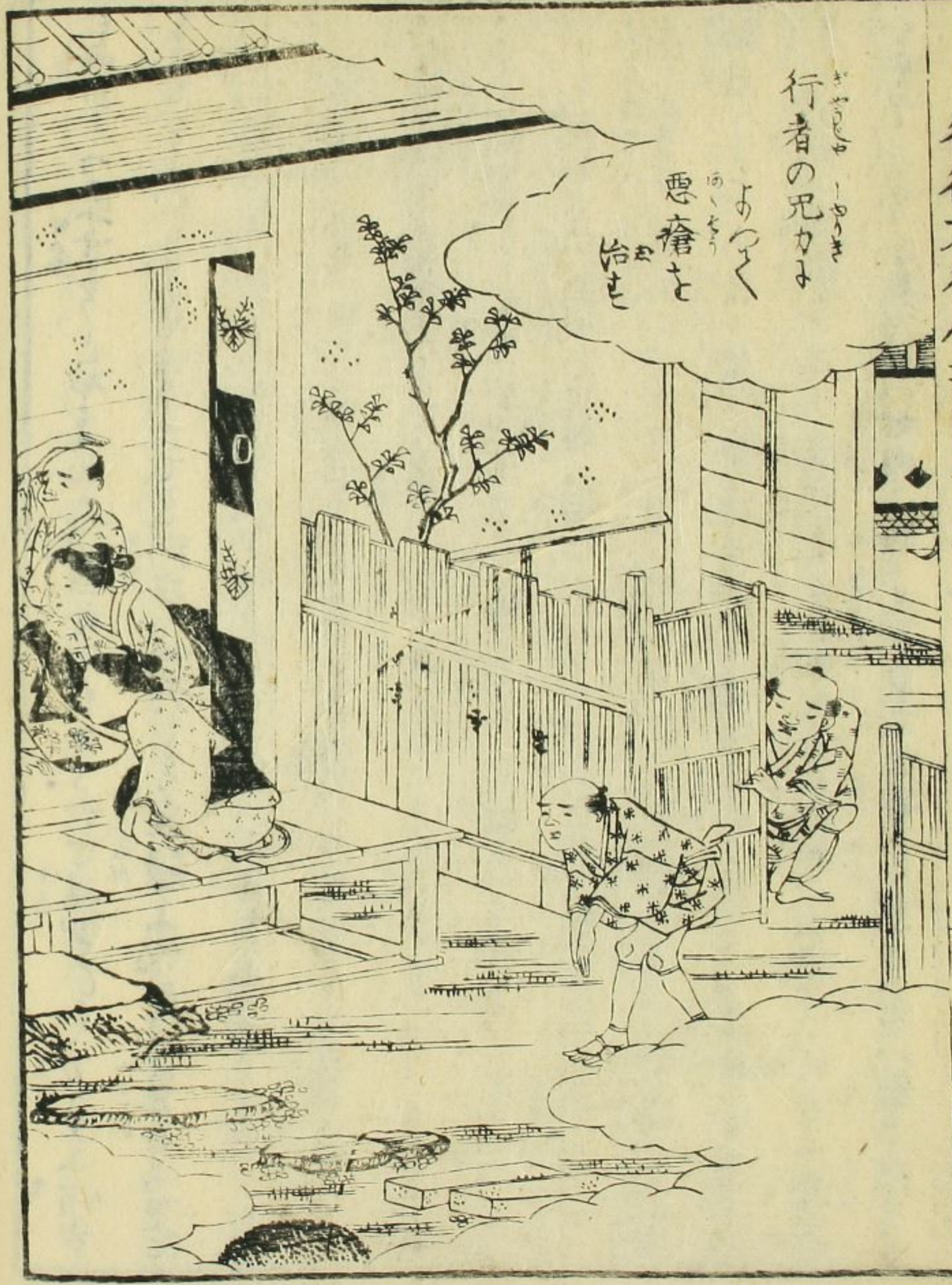
勸意ハよろこびて。蓋々嫌々として言え。まゝ善見も此より云々せむるを
配りけん。善見ハ心中まゝとていふども。父のつらく第一たる縁談なれば。とも
憂へるもひい。早速熱談をかよひたれ。勸意ハ急ぎ吉日を多し。都て滞り
なく調ひ既不言日ふも。親類縁者出入り者皆集りて。賑ハ一さる限り
阿古。我身の賤一きを顔て快嬉心もななく動き。夕黄昏も近くもの。善見
ハ衣服を改め媒の者とうち連々女の方へ出行り。女の方行て。阿古ハ心さやらず
善見ハ舌間小ぬぎ置一衣類をたみなどして在り。甚あつた。つ
なりり。善見ハ滞りなく。誓烟を調へ次の日我家に歸り。女ハまた次の日
が方へ来り。男勸意をととめ。親類の盃を請納。万事残りかゝり相と。日
を累々しる。善見ハ阿古をよび入ふ。いふ。いふ。と側近ぐめ。いふ。何故の
をよびてまかちよせたり。さて阿古ハ如何なる因縁や。かゝる憂命はゆ
とかなふ。つりてかぬちよき世の中。なかりへんより淵川。身をまづめく。めりし
日毎子見の苦を免んと。既かくごをきり。又忍び出んとせ。此時善見の
声よてよびらる。也。氣をとり直一行と見れば。一たり用ふも。つらさる。よ直
よせし詞や。一く者。い。せまりし胸も。女一く開き。そのまの。よびらる
ども。是れもい。既其場。臨むといふ。善見ハ心よひりされ。止か。つら
度も重りて。其念の晴り方もなく。皆子良司。身不請。重き病。身。八男
勸意を。た。の。皆々。教馬。醫。療。を。加。良。を。用。り。と。い。ふ。も。其。験。し。な。く。日。さ
累て。面部。惡。瘡。を。生。じ。美。玉。の。こ。こ。ま。西。女。鬼。女。の。如。く。子。變。じ。日。々。面。て。い
く。ま。つ。た。かり。見。へ。ん。神。佛。子。祈。り。又。子。良。司。の。實。父。母。なる。者。ハ。數。き。悲。し。こ

む唯ゆつ。つ。女。あ。り。と。ち。よ。ひ。ら。ん。善。見。の。ま。の。ち。よ。と。見。習。ひ。く。万。子。阿。古
とよびてまかちよせたり。さて阿古ハ如何なる因縁や。かゝる憂命はゆ
とかなふ。つりてかぬちよき世の中。なかりへんより淵川。身をまづめく。めりし
日毎子見の苦を免んと。既かくごをきり。又忍び出んとせ。此時善見の
声よてよびらる。也。氣をとり直一行と見れば。一たり用ふも。つらさる。よ直
よせし詞や。一く者。い。せまりし胸も。女一く開き。そのまの。よびらる
ども。是れもい。既其場。臨むといふ。善見ハ心よひりされ。止か。つら
度も重りて。其念の晴り方もなく。皆子良司。身不請。重き病。身。八男
勸意を。た。の。皆々。教馬。醫。療。を。加。良。を。用。り。と。い。ふ。も。其。験。し。な。く。日。さ
累て。面部。惡。瘡。を。生。じ。美。玉。の。こ。こ。ま。西。女。鬼。女。の。如。く。子。變。じ。日。々。面。て。い
く。ま。つ。た。かり。見。へ。ん。神。佛。子。祈。り。又。子。良。司。の。實。父。母。なる。者。ハ。數。き。悲。し。こ

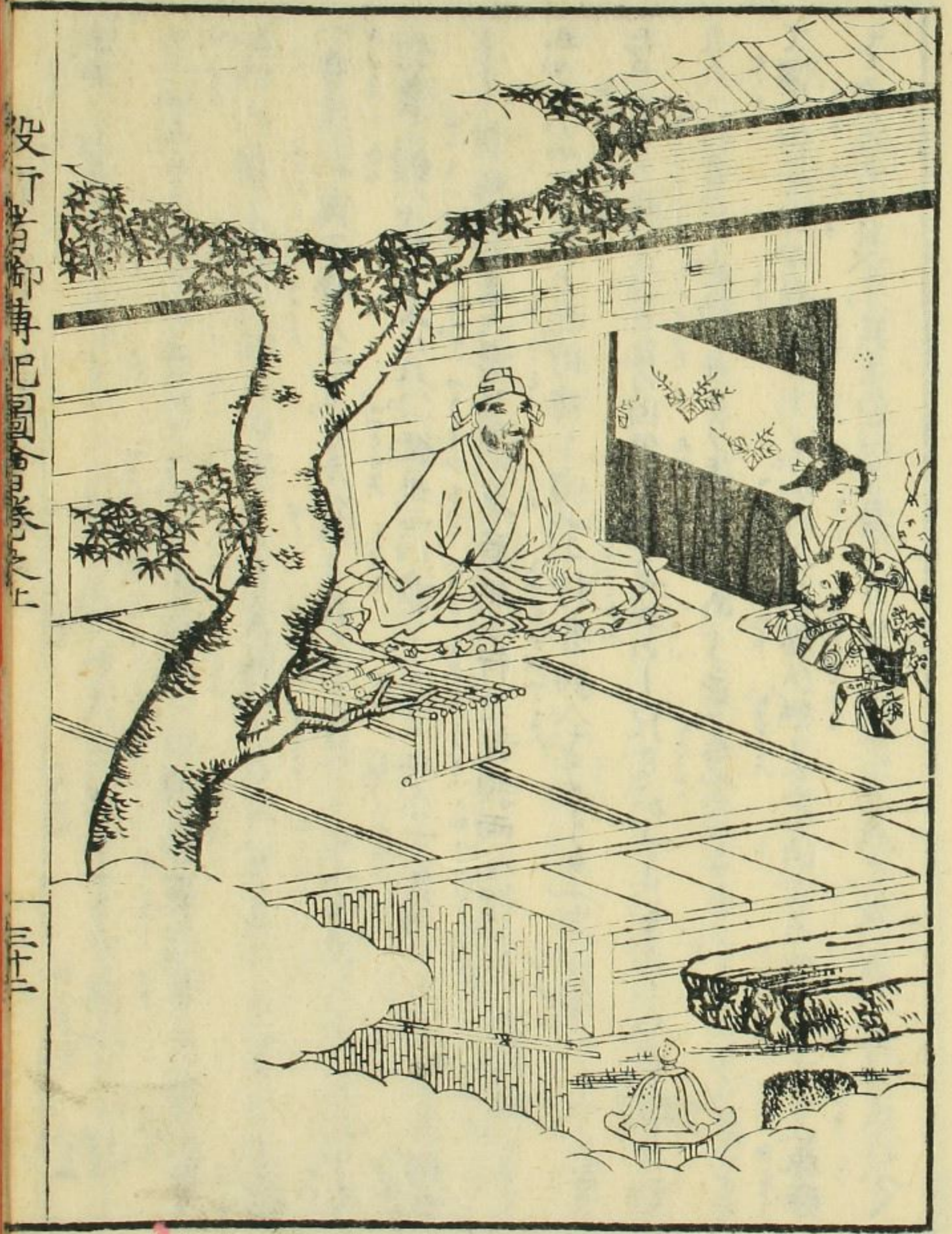
三十一

三十一

役行者傳言圖會卷之三



行者の兄カキ
よつぐ
悪瘡を
治せ



役行者傳言圖會卷之三

我命わがいのちふ替かへたまきたまきあしあしひひととななーーんんれれどどもも力ちからああよよばばどど一いち門もんののここととすす集あつ會くわいしてして評ひま一ひま

りりの中なかふふああももひひ出い出でたるたる者ものほほりり大やま和ま國のくに茅ちの原のさ郷とはは役えん優う婆う塞そく行ぎ者ぎやうとといいふふ人ひとありあり

加か持ぢ祈いのち禱たうをを願ねがふふ神かみ仏ぶつのの崇まつりり又また惡あく靈れい物ぶつ怪かいなどなど其その驗あやのの見みええぶぶららななしし又また或ある時とき

ハハ者もの婆は塞そく鳥ちうのの藥やく力ちからふふししかかととああひひ難がたきき病びやう人にんもも全ぜん仗じやうしし死し人にんもも蕪わ生せいままととええりり其その

行ぎやう者ぎやうふふ願ねがふふややとと云いふふ紙し是こゝろはは子こゝろ同どう意い一いつ

とと一いつ親まへ類れい家け未まへ大たい勢せい屬じやく副ふ茅ちの原のさ郷と小せう行ぎやう先まへ親まへ類れい兩りゆう人にん行ぎやう者ぎやうのの前まへふふ願ねがふふききてて

ああららののややりりままをを述のたまふふ祈いのち禱たうをを願ねがふふ行ぎやう者ぎやう病びやう人にんををめめめめ一いつああへへ鬼おに女によののここととくくななりり

たたのの女によをを召めい連れんとといいふふ因いん果くわみみてて如ごと是ごと恥かたじけづづかかららななりりややとと悲かなししここ

ららんんババ行ぎやう者ぎやう曰いくく此こゝろ病びやうハハ身みよりより生まじじららふふああららじじとと恐おそるる惡あく靈れいののままままととこころろななりり是こゝろもも是こゝろをを

てて灑そハハ治ちままるる疑うたがひひななししとと加か持ぢ水すいをを賜たまひひ猶なほ是こゝろをを治ちままるる時ときハハ外ぐわい子こままもも惡あく瘡そう

をを發はるる者もの有あるるべべしし其そのももののこことと身みよりより生まじじらら病びやうハハああれれとと教おしへへばば皆みな々々恐おそるるべべしし

是こゝろをを以もつてて急いそぎぎ倉くら造つくりり歸かへりり行ぎやう者ぎやうのの仰おほせせ一いつ紙しへへ通つうトト未まへ審しんくくハハああららじじとと

ままづづ子こ良ら司しふふををめめてて洗つせせけけんん子こ画え々々ししもののをを洗つふふがが加かくく日ひ々々ままももくく

たたのの七しち日にちままししてて消きええせせたりりああののふふらら古こ々々面めん々々ハハ何なにやららんん色いろ付つくく瘡かさささるる

限かぎりりななしし終つひふふかかきき破やぶりりてて子こ良ら司しがが面めん々々ををううつつままががここととくく日ひ々々子こ重おもりりてて

鬼おに女によののここととくくふふななりりららんん子こ良ら司しがが惡あく瘡そうハハ阿あ古こがが惡あく靈れいままてて阿あ古こののここととをを知しりり且かつ又また

行ぎやう者ぎやうのの靈れい驗げん神かみののこことと一いつとと畏おそるる尊たうままががううハハああららじじととささててもも阿あ古こハハ重おもきき病びやうトト臥ふし今いまハハ

死しをを待まちすす外ぐわいハハああららじじとと深ふかくく子こ良ら司しをを恐おそむむととハハああららじじととささりり一いつがが如ごと是ごと難がた

病びやうををううけけ一いつハハ行ぎやう者ぎやうのの方あた便べんなりり子こ良ら司しハハ父ちち母ははのの免めんせせ一いつ本ほん妻さいなりり阿あ古こハハ譬たとへへ深ふか

きき中ちゆうなりりとともも恐おそるる女によのの身みハハままもも恐おそめめんん心こゝろハハ僻ひがつつゆゆなりり此こゝろ根ね元げんハハ皆みな善ぜん見けんのの心こゝろ

よりよりああららじじとと善ぜん見けんハハ早はやくく心こゝろづづきき二に人にんのの女によをを恐おそむむととハハ皆みな我わが身みのの罪つとののりりとと

是こゝろよりより父ちち母ははををここととめめ二に門もんのの人にん々々へへ阿あ古ことと密ひそ通つうせせ一いつつつままをを懺ざん悔かい一いつ猶なほままもも

子良司も言まかせ、急ぎ茅原の郷へ行。はるまで行者へや向代。我身
は悪病をつくりとも。河古の病苦をもくわたまよへを願ふ。行者は
懺悔したるを感へみ。加持水を賜り。是とともく、懼るときは河古
の悪瘡も治し。心も清静なまらん。仰よまよのた。善見は急ぎ歸りて。阿
古も此よへを通じ。加持水をもて洗ふ。あつ七日よりて治りり。河古
八行者の兇驗を感、且尊。黒髪を坊と尼とあり。行者御登山の後、御母
仕へる。是のことき靈驗もくまゆ。依之茅原参りと号し。諸方より
群参して。行者を拜し。加持水と此戴し。眼を洗ひ。まゝ痛牙子震きなど
さるふ。其驗し何れたあり。此故に口々参詣も弥増り。同國高市郡も行者
の罰を蒙る者あり。其謂れを尋るふ。一人の娘をもちたる。老のふたれ八壇の
養育しけり。成長の後、万事氣隨りして。父母を蔑り。僧を好む。多々吞

て八淫事を好む。こども生得醜く。きりり限りあり。面て八珠の丸盆のこども
して。言語雷鳴も異あり。立振舞、瓢子足のつら。皆忌嫌ひて近よる
者し。ちかりん。年の頃も九餘り。三つ四つもまきん。まゝ男子の情を
まゝ。是を聞て、忍び逢者あり。是等、蓼食虫の類ひなり。女悦ぶる限り
あり。再三再四忍び逢。男八元末戯り。慰み。敢てまゝらむ。女八が
醜き也。外見か。ならん。ちもひ。女もど。ちり。時、媒を頼りて。招
とへども。まゝにま。女八は怒。自行く。尋る。子夜八逢り。難く。胎し
せまり。晝中も行く。見れば。男八而親の前。在。何故聞居り。い。見へ。女八無
礼。入り。襟もと。取。ひ。さ。へ。さ。ん。ぐ。は。白。白。たり。我。か。醜。き。八。最。初。あり。知
の。今。さ。外。見。替。へ。八。客。易。ま。う。け。け。我。方。入。聲。ま。ま。此。家。へ
嫁。入。故。二。つ。一。の。返。答。せ。よ。高。声。言。懲。せ。八。皆。々。驚。き。詞。あり。本人八やうく

不省めく。其場をまゝたれど。絶縁ふおよん難くて是非なく妻よ
 迎へりしが。常子不浄と厭ふを。神佛も尊むことなす。心のまゝに行ひて
 在らぬが。此頃まある者。近隣の人々誘引し。茅原へ参詣せよと思
 たち。宵より其ま度ふかよひる子。妻はつゝやまて。いざり物参り。何の用また
 つゝと云ながら。衣服をとり扱ふを見。男は是を止めて。女は月水の穢れ有
 行者参りよ。忌事あり。必是よかり。つゝのなかりと禁まらん。女は腹たて扱
 も。而倒るる行者かなと。夫の制するを用ひ。衣服食用等のるを賄ひ
 る。夫は心あしく。かもいど。約束のるを。早朝より。茅原郷へ行。途中
 より。足痛して行。かまら。終の道子。惱む不審。是は必む行者の祟りな
 り。心づき。強く行んとせ。嚴罰を蒙る。いづれと。傍友ふ家内よ
 不浄のゆゑ。を語り。各ハ参り。我ハ是より遙行せんと云。皆々本意

きたり。ふちもいど。是非なく別れて参詣。還りの道を。いざり。カノ男
 参んと。其れ痛く強く。下向ふ。かゝる常のごと。一統恐れ。かへりける。足痛
 せ。男ハ大い。腹。女ハ慎。い。き。行者の罰を蒙り。あり。我
 家内と。で。家内ハ大い。騒働の。なる。是を。窺。女ハ例の。大声。よ
 向。や。男ハ。怒り。を。今日こそ。い。難。と。家内よ
 い。親類縁者。を。近所の人々。大勢。ち。より。女を捕圍。宿り。て。ある
 ハ。直。踏。と。近。れ。皆。是。を。一。隔。今日例の。氣。ま。不
 何。乱心。の。て。あり。と。云。を。聞。く。声。を。り。日頃。神。と。も。佛。と。も。思。ふ。の
 なく。不浄の。身。と。り。我。茅原。参。り。を。妨。其。罰。よ。て。や。い。と。怒。れ。ん
 声。女ハ。驚。両。手。を。つ。の。頭。を。さ。げ。たり。尋常の。者。な。れ。ハ。ま。よ。む。の。こ。は。是。ら。う
 べき。と。い。れ。ど。五。年。以。前。嫁。り。て。より。以。来。一。度。も。頭。を。さ。げ。た。る。の。な。し。今日

てトのて礼義の正一きハ乱心よる欲と男も怒りをもさめたるハ奇と云べき歟。女ハ
 まっも踊りつゞー。高き我身の罪と。觸めりりる女。男ハ長年の家子會合
 かまらざるも行者の罰ありん。ヤ合せ川辺よ出之。潔齋。茅原郷子行志多
 のよ一も儀。免と願るるは行者是をきこめ。我罰せらるよ。常子不
 淨と禁むる。我よらよのよ。神の忌嫌。我ハ我是を禁むる。才
 目水の女。次ハ父母の忌服も請たる者。死人ハ觸る者。或ハ産穢。或ハ食穢
 是等ハ神の深く忌悪。今乱心の女を近よるるを憚らる。月水の據
 も去て後。身を清淨し。て連れと仰よらる。里人ハ恐れをす。て之歸
 一級ハ是と通。日敷を累女の身を清。教のと。茅原郷子連。きく願
 れば。行者近く召く。獨股持と捧て神と拜。次ハ女の頭上。かせかへば
 女ハ忽ち色を變。口を関くひ。たつこと不思議なれば。是より本心となりて

里人より行者の教あよ一を聞恐れ入る心を改め。信心堅固の身となり。家
 内腔トく。富榮トとたん。後世山上嶽へ登り人。のち。て。契齋精進ト。嚴
 密に戒慎。月水の女子衣服を縫ハ。めむ。女の持たる帶手巾等も。用ひざりハ
 此遺風ト。ん。裏ハ。慎む。

鎌足公御病脇役行者兎驗の話

並山階寺御建立之話

大職冠鎌足公難治の病。臥せ。醫療も盡。種々の良薬奇劑も用。や
 不其功なく。春。櫻を柳の難症あり。依之神子孫。宜。祈。と。さ。一。驗
 もなし。此。一。願。聞。達。一。六。主。上。を。奉。り。月。知。雲。客。冠。を。傾。け。集
 評。一。く。茅。原。の。き。と。一。勅。使。を。下。一。身。一。行。者。即。時。祈。念。一。あ。一。不。思。議。成
 り。な。日。を。か。さ。ひ。む。岐。方。は。な。む。む。き。三。七。日。よ。一。て。全。快。な。り。一。の。行。者。の。兎。驗

誰歟是を尊まざるんや。此余をむり。鎌足公の行状を前より行者の兇驗
 を後まざる。其文逆子似たれども。鎌足公の御徳を擧げらば。行者の兇力も
 何れも一がし。例せば相僕も勝ると云ふ。相半三歳の小兒なる故。日本一の大関する
 歟。是を聞き其力を誇りて。仍て志を高く鎌足公の御行状を何れもす
 見人のちとせ。倦み事あり。神
 柳大職冠鎌足公。天津兒屋根申春日之御裔より。代々天下の政を司り。ま
 藤氏の祖なり。御子不比等。西男有て四家分り。武智宮と南家と云。房前
 大臣と北家と云。式部卿と式家と云。大京大夫宮と云。是を藤の四家
 と云。房前大臣より十六代の後。法性寺志道公。三男あり。基實。基房。兼實
 と云。基實公の御子基通公。近衛殿と云。御孫兼平公。鷹司殿と云。兼實
 公。九条殿と云。兼實公の御孫。良實公。二条殿と云。良實公の御弟。實

恒公。二条殿と云。是を五攝家と云。皆藤氏なり。代々五攝家より出く
 関白の職も昇。天下の政をへ。い。他の姓より此職も昇り。神慮不
 かまらず。其爵と云。威にせし例あり。却説鎌足公の御徳をたづぬり。ま
 舒明天皇崩御の後。皇后御位はのせ。是を皇極天皇と云。奉り。宝皇と云。十
 時の大臣。蘇我蝦夷。威勢も。女帝と侮り。蔑より。我子入鹿と志めし。のこせ
 甘樫の岡と云。所家と云。建蝦夷の家と云。宮門と云。入鹿の家と云。谷の宮門と
 称す。儀式ハ萬事禁中の如く。我子を皇子と称する事。天位を奪ふ。催
 一。家の外。堀を構。城のごとく。門の左右。兵庫を建。常は兵を置
 軍戦の用意を専ら。依之疑ひも。か。者。女。の。と。い。威。執。は。恐。れ
 口外へ。中臣鎌足。後。蘇我。蘇我の隠謀をさす。輕皇子。内々。何。人
 と。夜中。忍。ひ。て。参。殿。一。て。伺。ひ。し。輕皇子。皇孫。帝。皇子。も。常。は。不。一。め。ま。旨。し

後醍醐天皇御記

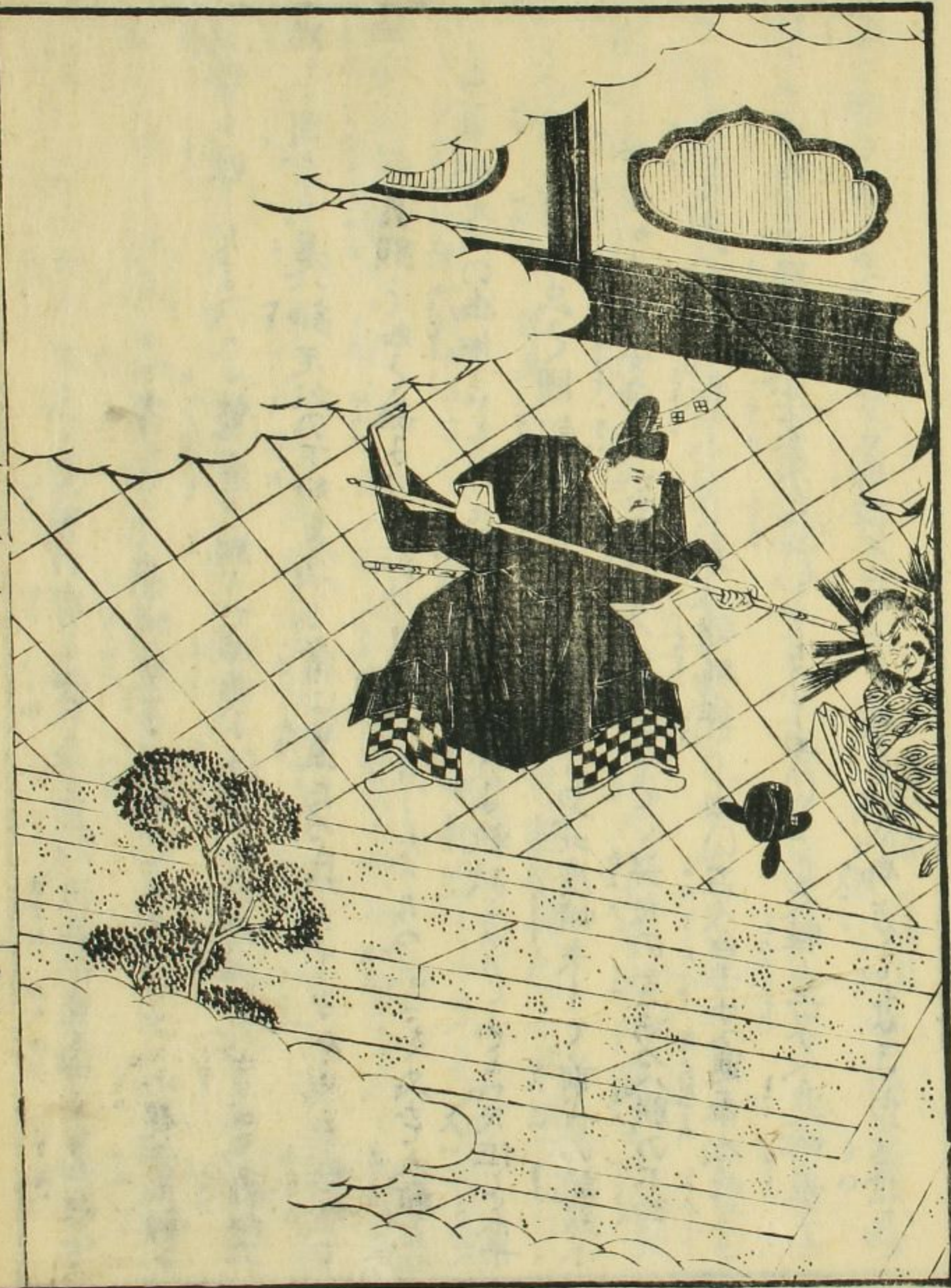
一三十九

之教直子もせられり。鎌足公竊まじりし。あひりり。藤我の父子。上と茂子も
 の事。天位を奪人との結構を決したり。常は無用の武士を置。武具を揃へたりを
 窺ひ不意に發して。天位を傾へとの企なり。早く征伐となされれば。やうき大事
 事。あつたこと。よ。よ。皇子も安のし。も。お。お。し。め。と。い。へ。ど。も。仰。足。も。痛。も。有
 て。常。も。參。殿。も。し。た。ま。は。む。び。き。こ。し。り。て。お。り。ま。事。又。藤。我。の。企。の。事。も。悉。く。ハ
 あり。め。さ。む。ま。い。大臣。と。討。人。事。容。易。な。り。也。い。ま。も。表。も。頭。れ。さ。り。り。比。方。の
 發。せ。ん。の。志。の。り。へ。の。い。ど。若。先。方。の。發。其。時。防。の。手。配。り。こそ。專。有。べき。り。な
 れ。と。穗。便。の。仰。なり。依。之。鎌。足。公。志。の。て。や。や。う。ハ。藤。我。蝦。夷。の。罪。ハ。重。々。なり。蝦。夷
 が。父。馬。子。公。崇。峻。天。皇。を。怨。奉。り。事。あり。て。直。駒。と。い。へ。り。者。馬。子。の。女。も。懸。想。し。た
 り。を。幸。ひ。女。も。密。通。させ。是。を。と。り。ぬ。顔。子。して。直。駒。は。之。含。め。て。帝。を。殺。し
 奉。り。其。後。女。と。密。通。の。罪。有。と。て。直。駒。を。梅。の。古。木。に。縛。り。遠。矢。を。か。けて。射

殺したり。是其姓を經とすべき罪なり。ま。蝦。夷。が。罪。を。之。ハ。聖。德。太。子。の。御。子
 山背王を攻んと班の宮をか。よ。せ。不。意。の。一。戦。も。あ。ら。ぶ。山。背。王。合。戦。より。あ。ま。り
 自殺し。依。之。馬。子。を。と。り。め。年。兄。弟。殘。り。も。止。び。あ。り。聖。德。太。子。傳。入。御。子。の
 重罪あり。今。ま。も。種。々。の。惡。計。を。企。り。お。お。く。ハ。猶。強。を。さ。し。り。の。い。へ。ど。も。和。衆
 り。輕。皇。子。も。其。罪。輕。から。ざ。り。を。お。お。し。め。を。と。い。へ。ど。も。痛。所。あ。つ。く。と。も。さ。く。街。心。に。ま
 か。せ。む。萬。事。葛。城。皇。子。年。即位。之後。ハ。大。智。天。皇。御。子。ト。仰。ま。し。の。へ。く。尊。ぶ
 葛城皇。子。か。上。人。し。急。ぎ。申。上。り。此。皇。子。御。父。舒。明天。皇。御。母。八。皇。極。天。皇。御。子。文。學。子。也
 未。だ。く。も。ハ。聡。明。敏。智。の。賢。也。と。り。鎌。足。公。此。度。の。大。事。を。具。し。か。た。ま。ま。皇。子
 驚。多。し。是。ハ。容。易。な。り。の。事。也。と。申。上。り。計。議。の。使。り。事。あり。ハ。大。事。な。り。は。損
 せ。ら。る。べ。し。謀。ハ。密。なる。と。專。一。と。も。然。れ。ど。も。い。ま。も。後。子。を。入。ま。し。の。い。へ。ど。も。地
 を。撰。ん。ぐ。中。合。さん。し。仰。よ。よ。も。く。密。談。の。地。を。尋。り。藤。の。花。の。咲。満。た。り。閑

靜の地あり此所は會合一入鹿を込と謀を討つべし。後此山を討ひの
奉と号を。又出と談じると。言意を兼て談世奉と号も。まは後子鎌足公
の尙廟として。十三重の塔の下に、山遺骨を納め其外本堂を始上の結構、他書
子悉しき也。後子奉を。葛城皇子、高島也あり。天智天皇と申奉る時子鎌足公
大職冠の号藤原の姓を賜事。此山を討ひて、蕪我を止し、たる大功よあつたり。今
當山に會合一入鹿。葛城皇子、鎌足公倉山田原の外なり。日々評しあふといへども
當時蕪我の威勢さかんして、常子兵を置、容易かへハビ、難し。まは軍兵を催し
一戦よあはぶ。大乱をひき、つて、事なるがごとく。去れ、謀く討の外なり。今百
齋國より使不鞠といへる物を献上する事あり。是幸の時なり。表書と奉る日
殿上はあわく入鹿と討つ。父の蝦夷を止し、はやまかりべし。是は一水。其日を
待まひらる。よく當日子ありれば、鎌足公ハ謀を催し、手配をなす。まはる大極

殿ハ帝出御之御席をもしひけ。御簾の外ハ大臣入鹿、鎌足表書と奉る者
ハ倉山田原より古入皇子、輕皇子、輕皇子、葛城皇子、八別の御席に座し、あは
百齋國の使参内し。大極殿に昇り、つれどなく帝出御あり。倉山田原表書
を誦むる。次ハ献上の鞠を、獻賢に備へ、帶りなく相まを。帝入御あり。百齋國
の使ハ宮外へ退き、此時一同子退き、あはべきの所。三皇子座して、働玉公を依之鹿
も座すと申せ、亦持葛城皇子入鹿もむのわあ。女女帝と侮り、萬事宮中の如
我家の儀式とよし。城のこく構。常子兵を置。天位を奪ふ。この隱謀頭たり
其罪免く所なし。それごとく、馬声のあつたり。鎌足公、隠し持たる白刃を振く
止かり。大カ無類の入鹿を、あはぶ。叙を帶せ、まを、進れ、まんと。後より、鎌足前
より、倉山田原切かけたり。まのれど、懐叙の、後でも、女も、屋より、色、あは
山田原とよめ、つれども、その、勢、鬼神のごとく。まのれども、あは、た、鎌足、後より



隠謀露頭えんぼうろけん
 入鹿滅亡いらかめつぼう



飛から。懷鈕逆手よとつて。入鹿の肩より貫き入り。流石の東海も息絶え
殿上の事よ外。知者なり。葛城皇子の御たのひにて入鹿の死體を
臣等子渡したまへ。大に驚急き歸りて。蝦夷は佳進も此時俄に八方より。蘇我の
詭計を圍たり。是は鎌足公の下知あるべし。常は置たる兵ども。力なほばど散乱して
蝦夷は隱謀露頭と知く。詭計を火をかけ。自害し死たり。乱はおよばず大敵を
一む事。鎌足公の御働きたり。蘇我の父子は執政ありしとき。天位を棄
んとの合。百子よつて。國記重宝を私に取置し。此度焼失して。前代の記録も
以びたる事少し。も女帝歎かせぬ。是のごとく。謀叛の者ある。朕の不徳を
早く位をあらんと。和を正し。諸卿評し。古く皇子へ進奉る。此皇子
辭して吉野の山里。隱れ出家の行ひ。とあり。手ひりる也。輕皇子へ進め奉る
是も深く辭し。五ども外に御位と。ころめをべき。御方もたまき也。是非た

御位よつとき。三十七代の帝。孝徳天皇とリ奉る。御諱、天津高。皇極天皇。御
在位三年。御位を譲り。あひ。御心やとくおぼしめすと。へども。輕皇子
へ常は御胞ある也。是をたかくあへ。させむひ。今年より年号を大化と
あひ。日本年号のすめなる。是より御代豊なり。が大化五年。長門國より。白
雉を獻じ。是より年号を白雉と改め。孝徳天皇へ常の御病ひ治
る也。御在位十年十月十日。させる御胞もたぐ。崩御あり。よめ。皇極天皇
重祚し。あひ。齋明天皇とリ奉る。鎌足公御執政なる也。御代豊なり。帝御
慎し甚深し。前より御在位の時。蘇我の謀叛やうく。志つあると。へども。其後百
日雨め。諸方の神社佛閣。祈雨せ。祈雨せ。と。へども。一滴も降ら。備前川は
石をのり。田畑も青さを見え。万民地を叫ぶ。かき。天皇南狩川
を行幸。檀土を進。祈たまへ。天子通。忽空の雲。甘雨を降して

仰ウケ深フカきを不しめしめしつり事なり。鎌足公一行者を信しトしめしとへども。初年ももも辞しりし事もももかりかりをのだを唯行者の教を守り。一字と建立一寺山階寺と号し。毎年十月維摩會を行ひ。七月は孟蘭盆會と行ひ聖靈と祭り。後は大和國高市郡。厩坂より一厩坂寺と号し。其後和銅三年。春日の地より一興福寺と号し。後世より一ても。維摩會孟蘭盆會絶を行へ。志のんどもは明の事の言傳へり。行者の岳徳と志る者まれゆり。猶是より一葛城御登山。難苦の御修行等。次の卷より擧げと見て知へり

役行者御傳記圖會卷之上終

早稲田大学図書館

011488555180